

平成 21 年度

修士論文

# ルイス・キャロルと夢の国～時計と鏡に見たもの～

松本朋子

京都ノートルダム女子大学

大学院人間文化研究科

人間文化専攻

## 梗概

英米では聖書とシェイクスピア作品について広く読まれ、未だに人気が衰えていない作品とは、ルイス・キャロル(Lewis Carroll)が著した『不思議の国のアリス』( *Alice's Adventures In Wonderland* )と『鏡の国のアリス』( *Through the Looking-glass And What Alice Found There* )である。この作品は世界中で様々な観点から研究されている。本稿では、この二つの『アリス』の主要テーマであり、終生キャロルの作品の中で扱われ続けたテーマである夢について、作品中で頻繁に使われる時計(あるいは時)と鏡から考察するものである。特に彼の最後の作品である『シルヴィーとブルーノ』( *Sylvie and Bruno* )と『シルヴィーとブルーノ 完結編』( *Sylvie and Bruno Concluded* )で彼の「夢」に対する思いが集大成されていると考えられる為、この作品も『アリス』と比較する上で考察の対象とする。

本稿では4章にわたって論を展開する。第1章はキャロル文学のテーマである夢を論ずる準備として、ルイス・キャロルの生い立ちと『アリス』が誕生するきっかけとなったアリス・リデルとの出会いを、これまでの様々な研究によって確立されているキャロルをめぐる史実に基づいて整理する。第2章はキャロル自身興味を抱き、『アリス』に頻繁に扱われる時計について論ずる。また、時計は文学作品において夢や死と関わるものであり、その視点を交えて検証する。第3章では『鏡の国のアリス』を中心に頻繁に扱われている鏡や鏡像現象について、時計と同様、夢と死との関わりを言及する。第4章ではそれまでの章を踏まえた『アリス』、『シルヴィーとブルーノ』シリーズ、そしてキャロルの「夢」に関して論じ、最終的な結論へ結び付ける。

本論の結論は、キャロルは時計や鏡という道具を扱い、『アリス』の夢を描いたと考えるものである。時計は、正確であるべきものであり、時間は守るべきもので、守ることで秩序が守られている。それが崩壊してしまった場所が『アリス』の夢の世界である。古くから権力を手にする為には、様々な時間の管理が必要と考えられ、『アリス』の中でも多くのキャラクターが時への支配を重視している。逆に、時を管理、支配出来なくなると永久に時は止まってしまう、同じ時を繰り返している。それは、夢の無秩序を表わす一つとなっている。また、鏡も夢の無秩序を表わしている。鏡は古来宗教とも深い関係があり、時には神の象徴としても考えられてきた。鏡は見えるものを映し映されるだけでなく、見えないものも映し映されると考えられてきた。しか

しながら、アリスは鏡の见えない部分を覗こうと考えて、鏡の国へと入っていく。そこは、近づけば相手が遠ざかり、記憶は未来から逆に記憶し、1カ所に立ち止まるためには、全力疾走し続けなければならない世界である。

さらに、彼は幼い頃から夢に興味を持ち、『アリス』やその他の彼の作品でも「夢」というテーマを扱いつづけた。それは、睡眠時に見る「夢」への関心だけでなく、キャロル自身の複雑な内的欲望も投影されていたと考える。なぜなら、キャロルは、人生は夢に過ぎないのかという疑問を抱いていたからである。主に幼い少女友達は、いつまでも子供ではいてくれず、大人になっていってしまい、彼との友情関係は消えてしまう。その、子供という儚さを永遠に閉じ込めてしまいたかったのか、キャロルは多くの子供を被写体として写真を撮っている。そして、大人になっていく子供を見送るキャロルもまた、老いて死ぬのである。キャロルは、子供が大人になり、人は皆老いて死する、そんな時の流れの無情さを『アリス』の中の夢として描いたのである。

# 目次

序論	6
第1章 『アリス』の誕生	
1節 ルイス・キャロルとなったチャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン	10
2節 『アリス』とアリス	16
第2章 アリスを惑わす時計	
1節 不思議な世界を作り出した時計	19
2節 アリスが見た時計達	24
3節 ウサギと時計	26
第3章 アリスを魅惑する鏡	
1節 鏡に見た奇妙な世界	30
2節 アリスがのぞいた鏡	33
3節 暖炉の上の鏡	36
第4章 ルイス・キャロルと夢	
1節 『アリス』の夢	38
2節 『シルヴィーとブルーノ』の夢	42
3節 ルイス・キャロルの夢	46
終章	49
注	51
引用・参考文献	57
図版出典	71

「道具とは我々の生活の表現である。従って我々が故意に物からその道具性を捨象し  
ない限り、物は表現であり外に出た我々自身である」  
和辻哲郎『人間の学としての倫理学<sup>1</sup>』より

## 序論

本稿はルイス・キャロル<sup>2</sup>(図1)(Lewis Carroll)(本名:チャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン<sup>3</sup>(Charles Lutwidge Dodgson<sup>4</sup>))が著した『不思議の国のアリス<sup>5</sup>』(*Alice's Adventures In Wonderland*<sup>6</sup>)と『鏡の国のアリス<sup>7</sup>』(*Through the Looking-glass And What Alice Found There*)を主に取り上げ、この二つの『アリス<sup>8</sup>』の主要テーマである夢について、作品中で頻繁に使われる時計(あるいは時)と鏡から考察するものである。「夢」というテーマは、終生キャロルの作品の中で扱われ続けたものである。特に彼の晩年の作品であり、最後の作品である『シルヴィーとブルーノ』(*Sylvie and Bruno*)と『シルヴィーとブルーノ完結編』(*Sylvie and Bruno Concluded*<sup>9</sup>)で彼の「夢」に対する思いが集大成されていると考えられる為、この作品も『アリス』と比較する上で考察の対象とする。

数学者・論理学者、写真家、作家、詩人、発明家、牧師などの様々な肩書を持つキャロルによって書かれた『アリス』は、英米では聖書とシェイクスピア(Shakespeare)に次いで広く読まれ<sup>10</sup>、頻繁に引用される作品でもある<sup>11</sup>。さらには62の異なった言語に翻訳され、部分的に訳されたもの、訳されたものの未出版のもの、点字や速記体で書かれたものを含めれば、1994年時点で137の言語(定義上「言語」と認められていないものも含む)が『アリス』を取り上げ、世界中に多くの読者がいると言われている<sup>12</sup>。ヴィクトリア朝(1837~1901)、エドワード朝(1901~1910)において『アリス』は、その時代最も優れた児童文学作品とも言われている<sup>13</sup>。

今日においても『アリス』への関心は衰えておらず、ウォルト・ディズニーによるアニメ化、さらに2010年春にはアメリカのティム・バートン監督(Tim Burton)による実写とモーションキャプチャーによる映画公開も予定されている<sup>14</sup>。

また、世界中でキャロルや彼の作品に関する論文は多く存在している。主な先行研究内容は、作家論においては、写真家として、聖職者として、挿絵画家ジョン・テニエル(John Tenniel)との関係から、少女たちへの手紙から見るキャロルなど多岐にわたる。特に、彼の性格、趣味に言及したものが多く、近年では彼独特の少女友達への固執は、ピーターパンシンドロームや性的ロリータ・コンプレックスからきたのではなく、自閉症だったという研究も見られる。筆者がここで展開しようとしているア

リスの夢についての研究、特に作品の中に置かれている道具（時計や鏡など）を通じた研究は少ない。

多くの散文、韻文作品を残したキャロルであるが、キャロル研究としては『アリス』論が多く、特に言葉遊びや、詩のパロディー、話の中に見る隠喩や風刺を中心に論じられる。他に、言語学の見地から読む『アリス』、明治時代からの『アリス』の翻訳論、『アリス』に見る服飾論、『アリス』の中の料理論、挿絵論などと幅広く研究されている。この他の分野に関して、本田英明は『ルイス・キャロル小事典』の中で、歴史的方法と伝記的方法、心理学的アプローチ、フロイト派、ユングもしくは神話学による分析、記号論と構造主義、マルクス主義批評と分類している<sup>15</sup>。

さて『不思議の国のアリス』の誕生は、1862年7月4日（後にキャロルはこの日を「ゴールデンのアフターヌーン」と呼ぶ<sup>16</sup>）、キャロルがリデル三姉妹および友人のトリニティ・カレッジの特別研究員であるロビンソン・ダックワース(Robinson・Duckworth)との、オックスフォード近郊から5マイル離れたゴッドストウ村までの旅路の途中、船の上で、アリスという名前の女の子の冒険物語を即興で少女たちに語って聞かせた時のことだった。この時の物語が『不思議の国のアリス』の元となった『地下の国のアリス<sup>17</sup>』(Alice's Adventures Under Ground)である<sup>18</sup>。

当時の英国は、歴史的にヴィクトリア朝と言われ、世界で最初に産業革命を経験し、経済基盤を農業から工業へと移行し、近代的な生活の基盤を築いた時代であった。都市部における中流階級の職業は増え、都市部に移住し、都市化が進行していた。この経済的な繁栄、初等教育の義務化、児童就労規制によって子供の時代が長くなっていく。そして、その頃から中流階級の人々は、家庭を安全と継続の象徴として、家庭生活の充実と家族の絆を重要視するようになり、その中で元来の考え方であった「子供は二の次<sup>19</sup>」を時代遅れと考えて行くようになったのである。こうした中で、子供服や子供向けの本が台頭していったのである。その中で生まれた児童文学の一つが『不思議の国のアリス』である。

『不思議の国のアリス』は、友人のジョージ・マクドナルド(George・MacDonald)夫妻に出版を勧められ、挿絵を当時『パンチ』の政治風刺画家で有名であったジョン・テニエルに依頼し、1865年にマクミラン社から出版された<sup>20</sup>。また、その7年後の1872年に『不思議の国のアリス』の続編として書かれた『鏡の国のアリス』を発表する。この二つの『アリス』の物語は、主人公アリスが見た夢の中の冒険が主題であると考えられている。1865年に「5歳からX歳までの子供<sup>21</sup>」に向けて書かれた『不思議の国

のアリス』では、物語の結末部まで主人公アリスの冒険は夢の世界だったという言及は出てこない。しかし、その物語の難解な展開や内容を作者は全ての年代の子供達に求めていたわけではなく、作者が 58 歳の時に 0 歳から 5 歳向けに書き直した『子供部屋のアリス』( *THE NURSERY "Alice"* ) は『不思議の国のアリス』を噛み砕き、話を短くし、絵はカラー版でサイズも大きくなり、さらに分かりにくい展開には解説が入っている。その物語は以下のように始まる。

ONCE upon a time, there was a little girl called Alice : and she had a very curious dream. Would you like to hear what it was that she dreamed about?

*THE NURSERY "Alice"<sup>22</sup>* p.4

あるところに、アリスと呼ばれる小さな女の子がいました。そして彼女はとても不思議な夢をみました。あなたもアリスが見た夢の話を知りたくないですか？

筆者訳 (以後特に注記のない訳は筆者訳とする<sup>23</sup>)

この文章からわかることは、『不思議の国のアリス』では、最後にアリスが覚醒するまでわからなかった夢の枠組みを最初に説明することで、荒唐無稽な物語の展開をわかりやすくする目的が含まれていることである。このことから、キャロル自身が、意図的に『アリス』作品を、夢の空間を使い、不思議でナンセンスな世界観を作り出しているのではないだろうかと考えることができるのである。

さらに、キャロルは『アリス』以外の作品にも夢を扱っている。叙事詩物語の『スナーク狩り』や最後の長編小説の『シルヴィーとブルーノ』シリーズについても同様のことが言える。そもそも、ルイス・キャロルは 13 歳の頃から家庭内観覧雑誌<sup>24</sup>を自筆で創作し、その中でも 1850 年に『恐怖』という題名の夢を舞台とした詩を残している。

以下が詩の最後のフレーズの抜粋である。

Amidst my scarcely-stifled groans,  
Amidst my moanings deep,  
I heard a voice, "Wake! Mr. Jones,



You're screaming in your sleep!"

*Horrors*<sup>25</sup> p.823

やっとこさ苦しげに出るうめき声の中で  
深い嘆きの中で  
私は声を聞いた 「起きなさい！ ジョーンズさん  
あなたは夢の中で叫んでいます！」

この詩の中で、外からの音による夢の終わり、つまり目覚めの瞬間を、少年キャロルは描いている。これは『シルヴィーとブルーノ』シリーズに多くみられる表現である。このように、キャロルは少年時代から夢という存在に興味を持ち、生涯「夢」を題材に作品を書き続けた作家だったのである。

本稿ではキャロルが生涯興味を持ち続けた夢がどのように『アリス』の中で、描写されているかを論ずる。そのために度々使用される時計と鏡が主人公アリスや読者を夢の世界へ導入する「文学の道具」として機能しているのではないかと考え、キャロルの『アリス』以外の作品、主に『シルヴィーとブルーノ』シリーズも交え論ずる。



図 1 クライスト・チャーチ学寮の大ホールに飾られているルイス・キャロルの肖像画（2007年9月4日筆者撮影）

## 第1章 『アリス』の誕生

### 1節 ルイス・キャロルとなったチャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン<sup>26</sup>

キャロルの家系は、イングランド北部の出自で、州の名家であり、紳士階級に属していた。しかしながら、多くの祖先は聖職者で、中には陸軍大尉や弁護士もいた。特権階級ではあったものの、特別秀でた人もいなければ、問題人物もいない凡庸な家系であった。キャロルの父チャールズ・ドッドソンと母のフランシス・ジェイン・ラトウィッジは従兄妹同士であり、4人の男子と7人の女子に恵まれる。キャロルは1832年1月27日、イングランド北西部チェシャ州のダーズバリ(図2)という村の牧師館で、2人の姉を持つ長男として生まれた。そして、父の働くオール・セインツ教会(図3)で洗礼を受ける。

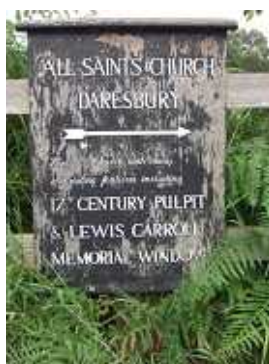


図2 ダーズバリ村の入り口の看板(2007年8月31日筆者撮影)



図3 ルイス・キャロルの父が牧師を務め、キャロル自身洗礼を受けたダーズバリのオール・セインツ教会(2007年8月31日筆者撮影)

キャロルの父は、クライスト・チャーチ・カレッジを古典と数学専攻で主席の成績で卒業し、英国国教会の副司祭で、人格的にも、教会運営上でも指導者としての手腕をも兼ね備えた非常に優れた人物であった。しかも、大変ユーモアのある人物であったと言われている。彼は長男の誕生を『ロンドン・タイムズ』紙に広告料を支払ってまで掲載させた。

そんなキャロルの父のユーモアセンスが、息子に受け継がれていると考えられるような手紙がある。父から息子チャールズへの手紙である。1840年1月6日、間もなく8歳となるキャロルに、父がリボン（図4）から送ったものである。



図4 キャロルの父が勤めていたリボンの大聖堂（2007年8月30日筆者撮影）

My dearest Charles

...You may depend upon it I will not forget your commission. As soon as I get to Leeds I shall scream out in the middle of the street, *Ironmongers, Ironmongers*. Six hundred men will rush out of their shops in a moment –fly, fly, in all directions–ring the bells, call the constables, set the Town on fire. I WILL have a file and a screw driver, and a ring, and if they are not brought directly, in forty seconds, I will leave nothing but one small cat alive in the whole town of Leeds, and I shall only leave that, because I am afraid I shall not have time to kill it. Then what a bawling and a tearing of hair there will be! Pigs and babies, camels and butterflies, rolling in the gutter together –old women rushing up the chimneys and

cows after them-ducks hiding themselves in coffee-cups, and fat geese trying to squeeze themselves into pencil cases. At last the Mayor of Leeds will be found in a soup plate covered up with custard, and stuck full of almonds to make him look like a sponge cake that he may escape the dreadful destruction of the Town....Then comes a man hid in a teapot crying and roaring, "Oh, I have dropped my donkey. I put it up my nostril, and it has fallen out of the spout of the teapot into an old woman's thimble and she will squeeze it to death when she puts her thimble on."

At last they bring the things which I ordered, and then I spare the Town, and send off in fifty wagons, and under the protection of ten thousand soldiers, a file and a screw driver and a ring as a present to Charles Lutwidge Dodgson, from

His affectionate Papa<sup>27</sup>

#### 私の最愛のチャールズ

・・・父さんは決しておまえの願いを忘れてりなんかしないから、安心していなさい。リーズに着いたらすぐに道の真ん中で「金物屋、金物屋」って叫ぶからね。あっという間に600人もの人々が彼らの店から飛び出して来るだろうね。四方八方に逃げ惑い、鐘を鳴らして、警官を呼び、町に火をつけるだろう。父さんは何としても、やすりとネジ回しと指輪を手に入れるからね。それでもし40秒以内に誰も持って来なかったら、ちっちゃな猫一匹残して、リーズの街の中のものは全て皆殺しにしてしまおう。そのちっちゃな猫1匹だって殺す時間がないから生かしておくだけなんだがね。そしたら、町の連中達は、どんなにわめき散らしたり、髪を掻きむしったりするだろう！豚と赤ちゃんが、駱駝と蝶と一緒に溝を転げまわる。お婆さんは煙突を駆け上るし、牛がその後を追うだろう。そして、アヒル達はコーヒーカップに隠れ、太ったガチョウは筆箱の中にぎゅうぎゅう自らを押し込むだろう。そして、ついにリーズ市長は、カスタードまみれの、アーモンドだらけの状態ですूप皿から発見されるだろう。恐ろしい街の惨状から逃れようとスポンジケーキのふりをしていたのさ。・・・ティーポットに隠れていた男が出てきて泣きわめくには、「ああ、私はロバを落としてしまった。私が鼻の穴にロバを入れておいたら、ティーポットの注ぎ口から婆さんの指抜きに落ちてしまった。もし婆さんが指をいれたら、ロバは押しつぶされて死んでしまう。」

ついに、頼んでいた荷物は届く。私は人々を殺さないでおく。して、1000人の兵隊に守らせた50台の荷馬車に、やすりとネジ回しと指輪をのせてチャールズ・ラトゥイッジ・ドッドソンに贈ろう。

愛するパパより

この父からの手紙の影響は、残酷なまでの暴力性や、指抜き、豚と赤ん坊、猫、ティーポット、蝶、カスタード、兵隊など、並列されるべきでない物と物が作り出す脈絡のない世界観などが『アリス』にも登場することからも明らかである。

暴力性は『アリス』の中では、ハートの女王の「首を切れ！」と表現され、指抜きはコーカスレースのアリスへの賞品として扱われる。また、豚と赤ん坊という表現は、まるで侯爵夫人の赤ん坊が豚に変身する時のことを指しているかのようである。猫に至っては、『不思議の国のアリス』に出てくるダイナやチェシャ猫、『鏡の国のアリス』のキティとスノードロップに現れているかのようである。ティーポットは『不思議の国アリス』のティーパーティーでヤマネが帽子屋と三月ウサギによって突っ込まれるものであり、蝶は『鏡の国のアリス』で混虫（二つのものが混ざって出来た虫の意）の1種として取り上げられる。カスタードはアリスが初めて大きさが変わる時に飲んだ飲み物の多くの味の中の一つであり、兵隊は白の王様によって、ハンプティ・ダンプティが塀の上から落ちた時に、助けとして出されている。特にこの手紙の中で注目したい点は、断定的な数字や時間である。これは、以後のキャロルの作品の多くに見られることであり、父からの影響を色濃く感じることができる。

1843年父親の転勤により、北ヨークシャー州クロフト村(図5)に移り住む。彼はクロフトに移住するまでは、父親の家庭内教育のみで育つ。また、この頃より、数多くの兄弟たちを楽しませる遊び道具や即興の芝居などを考え出した。しかしながら、クロフトへ移住した翌年にリッチモンドの寄宿学校に入学する。これがキャロルにとって初めて、家族と離れ、他の少年たちの集団と接する機会となった。この生活は1年半余りで終了するが、成績は良く、学校を出て間もなく、名門ラグビー校に入学する準備に入りながら、クロフト村の学校(図6)で教鞭もとっていた。それとともに、当時の多くの家庭で試みられていた、家庭内回覧雑誌を家族とともにまとめていた。



図5 キャロルの一家が住んでいたクロフト村の牧師館(2007年8月30日筆者撮影)



図6 クロフト村にあるキャロルも教壇に立った学校(2007年8月30日筆者撮影)

1864年にラグビー校に入学。学友達の野蛮な行動にも悩まされながらも、成績は良く、実りある学生生活を送ったようである。しかし、この頃の体験から、キャロルは少年嫌いになったとも言われている。そして、以前から幼児性の風邪の影響で右耳に不自由があったが、それがはっきりとした障害としてあらわれてくる。

キャロルは1849年の終わりに無事ラグビー校を卒業し、クロフトに戻る。そして、翌年の大半をオックスフォード進学準備に費やしていたが、さらに進化を遂げた家庭内回覧雑誌の作成にも精を出していた。この頃の雑誌には戯曲や散文にパロディー性のあるイラスト(図7)が書き込まれている。



図7 キャロルが家庭内回覧雑誌に書いた挿絵

1850年5月23日に、キャロルはオックスフォード大学クライスト・チャーチ（図8）に入学を許可され、翌年1月に寄宿生となる。しかし、その直後、最愛の母が死去する。キャロルは耳の障害と吃音障害を持っていたせいもあってか、控え目で友人作りに精を出すタイプではなかったが、スポーツ観戦や長い散策に精を出したりと、常に勉強をしていたわけではなかった。それでも、キャロルは学部時代非常に真面目な学生で、1851年11月には奨学金を獲得し、翌年の末には、第1次学士号試験の数学で第1級、古典で第2級を得る。それと同時に、生涯独身で聖職につけばクライスト・チャーチに留まれる資格の特別研究生に推挙される。そして、1854年10月末に数学の最終優等試験で第1級を獲得し、12月に学士号の授与され、同時に特別研究生となる。



図8 オックスフォード大学クライスト・チャーチ校（2007年9月4日筆者撮影）

1855年23歳となったキャロルは、クライスト・チャーチ学寮の図書館長補佐に任命され、さらに数学のチューターとなり、学寮内に研究室兼住居をあてがわれる。この年の7月27日の日記<sup>28</sup>に近く創刊予定であった『コミック・タイムズ』に寄稿を依頼された旨を書いている。その時に自分の本名をラテン語読みにした上、それをアナグラムして、また英語に戻すことで出来上がったルイス・キャロルというペンネームを考え出した。その2号に掲載された作品が、初の表立った出版物でのデビューとなり、ここに文字通りルイス・キャロルが誕生したのである。

## 2節 『アリス』とアリス<sup>29</sup>

1855年、ヘンリー・ジョージ・リデル(Henry・George・Liddell)が、国王の任命により、学寮長に就任する。その妻ロリーナ・ハンナ・リーヴ(Lorina・Hannah・Reeves)との間の第4子がアリス・プレザンス・リデル(Alice・Pleasance・Liddell)であり、『不思議の国のアリス』の誕生に欠かせない人物である。

キャロルが初めてリデル家の住人に会ったのは、1856年2月25日のボート・レースの観戦の場であった。そこにいたのはリデル夫人と夫人の妹、さらにアリスの兄と姉であるハリー(Harry)とロリーナ(Lorina)だけだった<sup>30</sup>。その後3月に入り、キャロルはハリーと親しくなる。キャロルはこの年の3月6日の日記の中でハリーのことを今までみたうちで一番の美少年であるとし<sup>31</sup>、その2日後、リデル家で開かれた音楽パーティーで首尾良くロリーナとも仲良くなったのである<sup>32</sup>。

運命の日は1856年4月25日の金曜日で、キャロルは写真友達のレジナルド・サウジー(Reginald・Southey)と共に、学寮長の邸宅を訪れ学寮長邸宅の庭の後ろ側にある大聖堂の写真を撮ろうと試みたが失敗していた。この時、庭で遊んでいたのがリデル家の、ロリーナ、アリス、イーディス(Edith)で、キャロルはすぐに仲良くなった。そして、彼は日記に、特別なことがあったという意味の「この日を白い石で印づける」という言葉をその日の日記に書き残している<sup>33</sup>。この翌週も3日続けて、2人は学寮長邸宅まで出かけ、子供達の写真を撮るがほとんど失敗している。当時の写真機は、天候や日の差し方、長時間の露光、人物は長時間静止していなければならないなど、そう簡単には写真は撮れなかったからである。

キャロルが初めて、リデル家の子供とボートに乗ったのはこの年の6月3日で、こ



の時は、ハリーだけであった<sup>34</sup>。しかし、その二日後、学寮長から許しをもらった長女ロリーナも加わる。この日もキャロルは「白い石で印づけた」<sup>35</sup>。この頃から、写真技術を持ったキャロルは、写真撮影を通じて、リデル一家を初めとして、多くの人と知り合う機会が増えて行く。

その後、キャロルは 1857 年に修士号を取得し、ユークリッド幾何学を中心とした研究に取り組み始めていた。その一方で特別研究生である義務の聖職者となるべき時期が近付いていた。彼は制約の多い正式の牧師にはなりたくなかったが、今の身分を捨てることや尊敬する父へ反逆もしたくないという葛藤から、1862 年 12 月教会執事の道を進むこととなる。

このような多忙な 50 年代後半を過ごしたキャロルだが、58 年 4 月の中旬から 62 年の 5 月までの間の日記が現存していない為、彼とアリス・リデルとの関係がどうであったか確かなことは分かっていない。しかしながら、1862 年 7 月 4 日<sup>36</sup>の船遊びの様子を踏まえても、関係は良好で、親しくしていたと考えられる。

そんな『不思議の国のアリス』の元になる小品が生まれた翌日、アリス・リデルはそれを本にして欲しいとキャロルに懇願したと後に回想している。同行者であったダックワースも、舟遊びの帰り、おやすみのなさいの挨拶をする時に、アリス・リデルは「アリスの冒険を私の為に清書して欲しい」と言い、「やってみるよ」とキャロルは答え、その日の夜、ほとんど徹夜で自分で話した話を書き起こしたと言っていたと回想していたということは多くの伝記において言及されている。

しかしながら、この本の下書きの執筆は第 2 回ロンドン万国博覧会見物のための列車内で行われ、1863 年 2 月 10 日に本文が完成した。1864 年 9 月 13 日に書き上げられた手書きの挿絵を添え、同年 11 月 26 日に「親愛なる子へのクリスマスプレゼントとして、夏の日の思い出に贈る」との献辞と共に、『地下の国のアリス』と題されたキャロルの自筆の挿絵入りの本(図 9)が、アリス・リデルの元に届いたのは思い出のピクニックから 2 年半後であった。

# Chapter 1



Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank, and of having nothing to do: once or twice she had peeped into the book her sister was reading, but it had no pictures or conversations in it, and where is the use of a book, thought Alice, without pictures or conversations? So she was considering in her own mind, (as well as she could, for the hot day made her feel very sleepy and stupid,) whether the pleasure of making a daisy-chain was worth the trouble of getting up and picking the daisies, when a white rabbit with pink eyes ran close by her.

There was nothing very remarkable in that, nor did Alice think it so very much out of the way to hear the rabbit say to itself, "dear, dear! I shall be too late!" (when she thought it over afterwards, it occurred to her that she ought to have wondered at this, but at the time it all seemed quite natural); but when the rabbit actually took a watch out of its waistcoat-pocket, looked at it, and then hurried on, Alice started to her feet, for

図9 キャロルの直筆の『地下の国のアリス』

## 第2章 アリスを惑わす時計

### 1節 不思議な世界を作り出した時計

第2章ではキャロルの作品に頻りに扱われる時計について論ずる。『アリス』の物語の中では、時計が頻りに出てくる。筆者が数えたところ、『不思議の国のアリス』では2ヶ所、『鏡の国のアリス』では4ヶ所となっている。さらにここに、時にまつわる言及を加えると、『アリス』の中では、12ヶ所に及ぶ。また多くのキャロルの他作品にも時計が頻出している。

中世の頃からヨーロッパでの時計の意義は主に宗教目的で、神に祈りを捧げる時を知るためのものであった。ミサなどでも時間を意識した祈りも多く、教会には時計塔が必ず伴っており、地域の時を知らせる重要な場所でもあった。なお、17世紀から18世紀にかけてはイギリスとスイスが時計技術最高潮といわれ、他国を圧倒していた。また、イギリスはグリニッジ天文台のように、時間を統一することに関しても、他の国を超えていた<sup>37</sup>。

以上のことから見ても、イギリス人であり、牧師の子であり、後に牧師となったキャロルは、時間や時計という秩序だったものが、相当身近なものだったと考えることができる。幼い頃から牧師である父の説教を教会で聞き、時を刻むという意味でも村の中心的な存在だった教会で育った彼は、時間というものに敏感であったと考えられる。くわえて、キャロルが時計や時に関しても特別な興味を持っていたからであり、そのことが、時計や時に関する様々な問いを周囲の人間にしていることから明らかである。

例えば、1849年にキャロルは姉のエリザベスに2つの時計に関して手紙を書いている。キャロルはその手紙の中で、「2つの時計がある。1つは動かずに、もう1つは1日1分の割合で遅れる。さて、どちらの時計がいいか」と書いている。キャロルはこの場合は、1日1分遅れても、動いている時計のほうがいいと普通は答えるであろうとした上で、動いている時計の場合は、2年に一度しか正しい時間にならないが、動いていない時計は、1日に2度も正しい時間を示していると仄めかし、本当に動く時計がいいのかどうかの疑問を投げかけているのである<sup>38</sup>。

そもそも、時計を生み出した時とは何なのだろうか。ジャック・アタリ(Jacques・Attali)は『時間の歴史』の中で、個々の社会は、それぞれ固有の時間と歴史を持ち、

歴史理論のうちに自らを刻み、曆を征服して組織となる一方で、時間の意味の周りで文化は形成されるとしている。また、権力を手中に収めるということは、他者と自分自身の時間、現在と未来の時間や過去と神話の時間を管理することであるとする<sup>39</sup>。

時間の管理と言え、以下のような『不思議の国のアリス』の帽子屋の言葉がある。

'He won't stand beating. Now, if you only kept on good terms with him, he'd do almost anything you liked with the clock. For instance, suppose it were nine o'clock in the morning, just time to begin lessons: you'd only have to whisper a hint to Time, and round goes the clock in a twinkling! Half-past one, time for dinner!'

*Alice's ADVENTURES IN Wonderland*<sup>40</sup>, pp.72-73

「時間君は叩かれるのを我慢できないでしょう。だから、君が彼と仲良くしてさえいれば、彼はたいてい君の好きな時間にしてくれるのだよ。具体的にいえばだね、仮に授業の始まる朝の9時に、君がただ時間君に囁くだけで、瞬く間に時計の針は回って、1時半になる。お昼を食べる時間にね」

帽子屋は時と友情が結ばれていれば、時を支配することができ、好きな時間に動かすことができるとしている。この話をしている帽子屋は、この時すでに時と決裂してしまい、時を支配出来なくなっている。その為、ティーパーティーの行われている場所は、永遠に6時なのである。この言葉において、帽子屋は時を管理していることの素晴らしさをアリスに伝えようとしていると考えられる。

また、晩年に書かれた『シルヴィーとブルーノ』において、さらに変わった時計が描かれている。ここで、『シルヴィーとブルーノ』シリーズの脈絡を簡単に紹介しておきたい。この物語は主人公が現実と夢（妖精界）の間を行き来する話であり、現実と夢の世界ではそれぞれ違う物語が存在している。その二つの話が交差して出来上がっているのが、この物語である。

まず、現実の世界の脈絡を紹介したい。常に語り手の主人公はロンドンに住む60歳近くの人物で、持病があり、年若い友人で医者のアーサーの勧めで、アーサーの住む田舎へ転地療養に向かう。主人公は行きの電車の中で美しく可愛らしいミュリエル嬢と知り合う。実はアーサーは彼女に惹かれており、求婚を考えていた。しかし、彼

女は従兄で軍人のエリックと婚約をしていて、晴れて結婚することになる。それを知りアーサーは絶望に陥り、インドへと旅に出る決意をし、主人公はロンドンへ帰っていく。そして、しばらくしたある日、主人公はロンドンのあるパブでエリックに会い、婚約は破棄されたことを知り、アーサーに会いに行く。アーサーはまだミュリエル嬢に求婚をする勇気が出ないでいたが、妖精姉弟のシルヴィーとブルーノの見えない助けにより、無事に結婚へと漕ぎつける。結婚式前夜、アーサーの元に漁師が訪ねてくる。実は近くの港町で死亡率の高い伝染病が流行り、最後の医者まで亡くなった為、アーサーに助けを求めてきたのだった。結婚式直後、アーサーはミュリエルの理解もあり、港町に行く決意をする。しかし、すぐにアーサーの訃報が新聞に載る。そんな悲しみの中、主人公はミュリエルの邸宅に至急来るように使いの者に言われて行くと、ベッドに横たわる生きたアーサーがいた。実は、訃報は勘違いであり、ライバルであったエリックが瀕死の淵のアーサーを助け連れて帰ってきたという話である。

一方、妖精界の話も、現実世界と同様語り手は主人公である。妖精姉弟のシルヴィーとブルーノの父はアウトランドの総督であり、弟でもある副総督は、妻と長官と共に総督の座を狙い、様々な陰謀を計画している。その陰謀にはまった総督は、乞食の格好をし、幼い子供を残しアウトランドを出て、フェアリーランドへ向かう。なぜなら、彼はフェアリーランドの王でもあったからだ。けれども、二人は父を追い、陰謀のことを話に父に会いに行く。父は全てを知っていたが、子供たちがまだ幼かった為、アウトランドに残し、辛い生活を送らせなければならなかった。そして、時が過ぎ、準備の整った総督は、アウトランドを攻め、弟夫妻は謝罪し、幼い姉弟はまた、父と暮らせるようになるという筋である。実際は、この二つの話が混在して進んで行く為、子供向けにしては構成も言語もかなり難解な物語だと言える。

その第21章の『象牙の扉を抜けて』と第23章の『<sup>アウトランディッシュ・ウォッチ</sup>異刻式懐中時計<sup>41</sup>』に描かれている妖精の国の時計（アウトランディッシュ・ウォッチ）が変った時計なのである。

Silently the Professor drew front his pocket a square gold watch, with six or eight hands, and held it out for my inspection. "This," he began, "is an Outlandish Watch—" "So I should have thought." "—which has the peculiar property that, instead of its going with the time, the time goes with it. I trust you understand me now?" "Hardly," I said. "Permit me to explain. So long as it is let alone, it takes its

own course. Time has no effect upon it. " "I have known such watches," I remarked. "It goes, of course, at the usual rate. Only the time has to go with it. Hence, if I move the hands, I change the time. To move them forwards, in advance of the true time, is impossible: but I can move them as much as a month backwards—that is the limit. And then you have the events all over again—with any alterations experience may suggest."<sup>42</sup>

*Sylvie and Bruno*, p.408

教授は何も言わずに、6本か8本も針のついている四角形の金の時計をポケットから取り出し、私の方へ差し出した。「これは」と彼は始めた。「異刻式懐中時計でして……」「それでそれが何か?」「……時計が時間に従うのではなく、時間が時計に従う特殊な性能を持っております。お解かりいただけましたでしょうか?」「いいえ。ちっとも」と私は言った。「では、説明しましょう。時計を放っておく限り、時計は時計らしく進んでいく。時はそこに何の影響も与えない」「そういう時計なら知っています」と私は答えた。「もちろん、それは通常の方法で進みます。ただ時は時計に従わなくてはならない。それゆえに、もし私が針を動かしたなら、私は時間を変えることになる。本当の時間より未来へ動かすことは不可能です。けれども、約1ヵ月前に戻すことはできる。それが限界なのですが。そして、すべての出来事を繰り返すことができる。経験が暗示するいくつかの修正を加えて」

上記の引用は第21章において初めて異刻式懐中時計が登場した場面であるが、教授がその中で主人公にこの特殊な時計について説明を行っている。この時計には、誰もが知っている普通の時計の機能の他に、過去に針を戻すことができる機能があり、針を動かした分だけ、現実も過去に戻る。この時計の話は、前述の帽子屋の話とは違い、時と直接関係を持つのではなく、時計という媒体を通しての支配となる点で異なっている。

教授も帽子屋も時計が時に従うのではなく、時計もしくはその時を動かしたいと願っている人物の思惑で動かすことができるということを説明している。帽子屋の言葉では未来形でしか願望は実現しないが、異刻式懐中時計は過去約1ヵ月分までしか時間を動かさない。そして、その瞬間から約1時間だけ出来事を逆の順序で起こすこと

が出来るという機能も付いている。これは、タイム・マシンの先取りといえどマーチン・ガードナー (Martin Gardner) は『注釈不思議の国のアリス』の中で述べている<sup>43</sup>。また、時計屋はアリスに時が止まってしまった理由を次のように述べている。

‘Well, I’d hardly finished the first verse,’ said the Hatter, ‘when the Queen jumped up and bawled out, “He’s murdering the time! Off with his head!” “How dreadfully savage!” exclaimed Alice. ‘And ever since that,’ the Hatter went on in a mournful tone, ‘he won’t do a thing I ask! It’s always six o’clock now.’ A bright idea came into Alice’s head. ‘Is that the reason so many tea-things are put out here?’ she asked.

*Alice’s ADVENTURES IN Wonderland, p.74*

「それでね、私がやっと1番を歌い終わろうとした時」と帽子屋は言いました。「女王様が飛び上がって『奴は時を殺している！首をはねよ！』と喚いたんです」「まあ、なんて恐ろしく野蛮なんでしょう！」とアリスは叫びました。「それからというもの」と悲しそうに帽子屋は続けました。「時は私の頼みは聞いてくれなくなったのです。だから今ではいつまでたっても6時なんです」それを聞いて、アリスはピンとききました。「だから、ここにはたくさんのお茶のセットが置いてあるのね？」と彼女は聞きました。

このハートの女王の「時を殺している」という言葉は、英語ではリズムが狂っているという意味があり、言葉遊びとなっている。しかしながら、これが帽子屋と時との決別の瞬間である。この女王が放った言葉が、帽子屋の時への支配を全て断ち切ってしまったのである。

節の初めにも述べたが、時計が遅れているように、止まっているように、実際の時は流れていて、時計の正確性をキャロルは疑問視している点が、『アリス』や『シルヴィーとブルーノ』シリーズの中にも表れていると考えられる。そして、『アリス』の中の時計は、時計の持ち主を時間で追い立てているか、時間が狂っていて、時の混乱を引き起こしている道具としか表されていないのである。そして、夢の世界は、その歪みの中に表わされていると考えられる。

## 2 節 アリスが見た時計

『不思議の国のアリス』の時計が扱われている有名な場面は、物語の冒頭部に出てくる懐中時計を持った白ウサギと、奇妙なお茶会をしている帽子屋の時計とそこから会話によって広がっていく奇妙な時間にまつわる話である。特に7章のお茶会の場面には、時・時計についてそれぞれ1回ずつ言及されている。そのうちの変った時計についての場面は以下の通りである。

The Hatter was the first to break the silence. 'What day of the month is it?' he said, turning to Alice: he had taken his watch out of his pocket, and was looking at it uneasily, shaking it every now and then, and holding it to his ear. Alice considered a little, and then said 'The fourth.' 'Two days wrong!' sighed the Hatter.

*Alice's ADVENTURES IN Wonderland*, p.71

最初に沈黙を破ったのは帽子屋でした。「今日は何日だったかね？」と彼はアリスに向かって言いました。彼はポケットから時計を取り出し、心配そうに眺め、時々時計を振ったり、耳に当てたりしていました。アリスはちょっと考え込んで、そして「4日だわ」と答えました。「2日間違っちゃる」と帽子屋はため息をつきました。

この最後の帽子屋の言葉を聞きアリスは驚くのだが、その理由は日付しかわからない時計だったからである。アリスの知っている一般的な時計は時間を告知してくれるものであるからだ。しかし、日付がわかる時計は、古来より存在する。しかしながら、ヴィクトリア朝において、男性の持ち物であった懐中時計は、常識としては時間のみを示すものであった。当時、日付よりも時間、何時から何が始まるから、遅刻しないようにといった時間の支配への揶揄がこの文脈には感じられる。特に遅刻という概念は、『不思議の国のアリス』の中で冒頭の白ウサギの「遅刻してしまう！」という言葉から、物語の終わりのアリスの姉の「早くお茶に行かないと遅刻してしまうわよ」という言葉まで、時に振り回されている人が描かれており、帽子屋の時への支配との対比が見受けられる。

また、英国では臨終の際、時計を止める風習があり、時の停止は死を彷彿とさせる



ものである<sup>44</sup>。この場面の時の停止と永久性は死を連想できる。特に『不思議の国のアリス』で頻繁に扱われている暴力による死は、このお茶会の場面にも表れている。また、死と時計の関係はグリム童話の1つ『オオカミと7匹の子ヤギ』にも見受けられる。オオカミが子ヤギを騙し、室内に侵入した際、柱時計に隠れた7番目の子ヤギには気づかずに出て行ってしまい、1匹だけ命拾いをするのである。他の子ヤギも母親によって後に救われるが、オオカミに飲み込まれないのは、柱時計に隠れた1匹であり、この話も生と死と時計が描かれている<sup>45</sup>。

また、『不思議の国のアリス』の挿絵や、ブロンズ像を制作していたシュルレアリスムの代表画家の一人と言われているサルバドール・ダリ (Salvador Dalí) は、しばしば記憶や夢などにまつわる絵に、融けている時計を描いている。ダリの描いた『不思議の国のアリス』の挿絵の一枚にも溶けたような時計が描かれている。また、彼の作品の1つに、『ヴィーナスの夢<sup>46</sup>』という作品がある。この作品は1935年から1945年にかけて制作された作品で、いくつかの作品が合わさって出来ている。その作品の中には、融けて歪んだ時計が描かれている。夢と時が歪むことが密接に関係しているということを、この絵は表していると考えられる。

さらに、『不思議の国のアリス』の約20年前に書かれたチャールズ・ディケンズ (Charles・Dickens) の『クリスマス・キャロル』にも夢と時計の関係が伺える場面がある。主人公の守銭奴のスクルージが、悔い改めるきっかけとなった夢の始まりは、近くの教会の時を知らず鐘の音がありえない回数(13回)鳴ったことに、スクルージが気づく場面である。ここでスクルージは混乱に陥り、今のは夢に違いないと自分自身に言い聞かせるのである。このように、鐘が鳴ることで夢が覚めるような表現は、世界中で有名なグリム童話やシャルル・ペロー (Charles・Perrault) が著した『シンデレラ』にも同様にある。主人公シンデレラにかけられた魔法は、12時を告げる鐘が鳴り終わると同時に解けてしまう。スクルージの場合は、鐘の音が夢の始まりであり、シンデレラは魔法の終わりを告げるものという違いはあるが、どちらも夢と現実の境界線は時を知らせる鐘であることは同一である<sup>47</sup>。

これらの例からも、時間が正常ではなく、むしろ時間の秩序が狂った世界こそ、夢の空間であり、時というものが夢と現実の境界線であるとしてキャロルは『アリス』の夢を描いている。また、夢の無秩序を時の混乱が表わしているとも考えられる。

### 3節 ウサギと時計

ヴィクトリア朝(1837 - 1901)は、幼年期特有の文化が形成され始めた時期であり、玩具や子供向けの雑誌、子供服が登場し、大量に生産された時代であった。そのような中で、人間の格好をして、二足歩行をする動物が絵や物語に出現してきたのである<sup>48</sup>。その動物の中でも、よく描かれていたのがウサギである。イギリスで野ウサギは至る所で見られ、馴染み深い動物である。それは、空腹に耐え忍びながら子ウサギを守る母ウサギの健気な愛情が19世紀の人々の倫理観と感傷に、訴えたからでもある。これらのことから、ウサギは当時の人々に好意的に受け入れられていたと推測できる<sup>49</sup>。また、三月ウサギの由来でもある三月ウサギのように狂っているという比喩は、イースターから来るものである。イースターで飾るイースターエッグは、イースターウサギが産むものと考えられている<sup>50</sup>ことも、英国人のウサギへの愛着を感じることができる。

『アリス』の中の時計と言えば、『不思議の国のアリス』のお茶会の場面の気違い帽子屋の時計の他に、冒頭部の白ウサギがチョッキから懐中時計を出しながら、アリスの目の前を駆け抜けていく場面がある。そこで、ここでは冒頭部の白ウサギの時計について言及したい。

when the Rabbit actually *took a watch out of its waistcoat-pocket*, and looked at it, and then hurried on, Alice started to her feet, for it flashed across her mind that she had never before seen a rabbit with either a waistcoat-pocket, or a watch to take out of it, and burning with curiosity, she ran across the field after it,

*Alice's ADVENTURES IN Wonderland*, p.12

そのウサギがチョッキのポケットから時計を取り出して、それを見て、走り出した時、さすがにアリスも驚いて立ち上がりました。ポケットのついたチョッキを着たウサギや、そのポケットから時計を取り出したりするウサギを今までに見たことがないと気づいたからです。そして、好奇心に火がつき、彼女はウサギの後を追いかけて走り出しました。

この場面(図10)は『アリス』のすべての始まりであり、キャロルがアリス・リデルにプレゼントした『地下の国のアリス』の時点から変わっていない場面でもある。動物であるウサギが、人間が作り出した物のひとつである時計を持ち、時に縛られていることがアリスにとって、とても不思議なことであったのである。



図10 ジョン・テニエル画『不思議の国のアリス』の白ウサギ

キャロルがこの冒頭に描いた白ウサギだが、次の二つから影響を受けた。一つは、彼の親しい友人であるジョージ・マクドナルドの著した『ファンタステス<sup>51</sup>』に登場する白ウサギである。そして、もう一つが、動物を描くことを得意とし、ヴィクトリア朝初期に大変人気のあったエドウィン・ランシア(Edwin・Landseer)が描いた『真夏の夜の夢』であり、シェイクスピアの同名の作品の一場面を描いたものである。その中で妖精の乗り物として白ウサギは描かれている<sup>52</sup>。

また、白ウサギは実在の人間をモデルにして書かれていた。それは、オックスフォード大学医学部教授で皇太子と後にアリス・リデルの恋人となるレオポルド(Leopold)王子の名誉医師であり、リデル家のかかりつけの医者でもあったヘンリー・ウェントワース・アクランド(Henry・Wentworth・Acland)博士である。彼は1884年にナイト爵を授けられるほど、社会的身分の高い人物であった。博士は垢ぬけた着こなしをする人物で、早足で歩く割にはしばしば約束の時間に遅刻するような人物であった<sup>53</sup>。

そして、不思議なことにこの白ウサギは他の登場人物とは異なる描かれ方をしている。

それは、『不思議の国のアリス』の中でこの白ウサギの持ち物だけが、事細かに文章で描写されている点である。『アリス』において登場人物が時計を取り出すシーンはいくつかあるが、その登場人物が身につけた服が何であるかを文章で描いているのはこの場面だけなのである。主人公のアリスですら、服装に関する記述はないのだから、いかにこの白ウサギが特別であるかが伺える。

さて、この白ウサギの服装について坂井妙子は『おとぎの国のモード』の中で、白ウサギの服装や携帯品は当時の中産階級のものであると述べている。懐中時計は正確には服飾小物ではないが、18世紀初めごろには紳士であることを表す大事な持ち物になっていたのである。さらに、金時計は理性的な男性が身に付けうる唯一の宝飾品であると、1853年に出版されたエチケツブックに記されていると述べられている。そして、チョッキに時計を入れるようになったのは、1828年ころであった。それまでチョッキには二つのポケットが付けられていたが、1840年以降に時計を入れる為の専用の三番目のポケットが付けられるようになる。そして、このような服装、持ち物は当時の「リスペクタブル」な中産階級の条件であった。ルイス・キャロルは中産階級の子供たちを対象読者としており、読者の親しみを誘ったと考えられる<sup>54</sup>。

また、ウサギと時計の組み合わせは『シルヴィーとブルーノ』の中にも出てくる。それは、第10章の『ベツノ教授』の教授のセリフにある。

"Doos oo always confuses two animals together?" Bruno asked. "Pretty often, I'm afraid," the Professor candidly confessed. "Now, for instance, there's the rabbit-hutch and the hall-clock." The Professor pointed them out. "One gets a little confused with them—both having doors, you know. Now, only yesterday—would you believe it?—I put some lettuces into the clock, and tried to wind up the rabbit!" "Did the rabbit go, after oo wounded it up?" said Bruno. The Professor clasped his hands on the top of his head, and groaned. "Go? I should think it did go! Why, it's gone? And where ever it's gone to—that's what I can't find out! I've done my best—I've read all the article 'Rabbit' in the great dictionary—"

*Sylvie and Bruno*, pp.316-317

「先生は2つの動物をいつも一緒にちちやうによ？」とブルーノは尋ねました。「残

念ながら、しょっちゅうな」と教授は素直に認めました。「そう、例えば、ウサギ小屋と大時計があるが」と教授は指さした。「あれらは少々混乱するんじゃない 両方共ドアがついとるからな。で、つい昨日のことだが、君達は信じられるかね？ 私は時計にレタスを与え、ウサギを巻こうとしたのだ！」「ウサギは巻いちゃら、動いた？」とブルーノは言った。教授は頭の上で手を握り締めて唸った。「動いたかって？動いたようじゃな。なぜそれが動いたかって？それはどこかに行ってしまったからじゃよ そして私は見つけることが出来ん！全力は尽くしたのだが 大きな辞典のすべての“ウサギ”の項目を読んだのだがね 」

この会話はナンセンスであるが、ウサギと時計の組み合わせは『不思議の国のアリス』の冒頭部を彷彿させる文脈である。教授は物語の中で最初から最後までナンセンスなことばかりしている人物だが、その言葉をまっすぐに受け止める幼いブルーノの言葉を、さらに真剣に返答する教授の為に、会話はますますナンセンスな方向へと進む。『シルヴィーとブルーノ』シリーズの妖精の国の会話は終始このような状態である。ウサギは教授の過ちにより時計のゼンマイのように巻かれ、当然ウサギは擦じられれば死んでしまうので、死んでしまったととれるのである。なぜなら、英語の“gone”は婉曲的に死を表す言葉であり、この場面では“go”という単語を使った言葉遊びで出来上がっているからである。

ここでもウサギと時計、そして時計と死の組み合わせがある。このように、ヴィクトリア朝時代に馴染みのあるウサギに持たせた時計は、アリスが不思議だと気付くことで夢の世界への入り口を表わしている。それは、人間が作り出した時計の持つ秩序だった世界を、動物が持ち、時に振り回されることが、ある意味秩序の崩壊であるからだ。秩序の崩壊は夢の始まりであり、これから先の『アリス』の夢の時の感覚を表わしているともいえる。

ここで述べてきたように、筆者は『アリス』の物語において、時計は物語の中で主人公を夢の世界へ導入される装置と考える。なぜならば、人は秩序だった世界で生活をしているが、夢空間に秩序は必要ない。その、秩序の崩壊を表わしている1つが時の無秩序であり、冒頭部の時計は特にこの『アリス』の夢の無秩序の一つを読者に予感させる。時計は物語の1つの装置であると言えるだろう。

## 第3章 アリスを魅惑する鏡

### 1節 鏡に見た奇妙な世界

さて、第3章では鏡について考察する。鏡そのものは、『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』双方をとおして、時計に比べれば、記述は少ない。しかしながら、望遠鏡の登場や、あるいは物語の中の行動や場面などがはっきりした対照構造になっていることなどは、鏡の機能を表現しているとも見ることが出来るのではないだろうか。

鏡の起源は人類と同じほど古く、最古のそれは水鏡に遡る。鏡とは、光の反射によって物を映し見るもの。姿見も同義である。鏡に映る像は鏡像といい、これは左右が逆転しているように見えるものの、幾何学的に正確に言えば、逆転しているのは左右ではなく前後（奥行き）である。現在は、左右反転しない鏡が開発され、「トゥルーミラー（真実の鏡）」と呼ばれ、売り出されている<sup>55</sup>。

鏡は古来、人工の鏡が出現するまでは、水面が鏡の機能を担っていた。人工的な鏡の起源はいつ頃からは解明されていない。しかし、現在考古学者によって発掘された最古の人工の鏡は、紀元前 6200 年頃から作られていたと思われる黒曜石を磨いたものであったことから<sup>56</sup>も、鏡は人類と切り離しては考えられないほど長い間使用されている。後に、ガラスの鏡の品質が良くなり、サイズが大きくなるにつれて、金属の鏡に代わって文化や社会に大きな影響を与えることになる。初期のキリスト教の神学者達、特に聖アウグスティヌスは、完璧な鏡を神の叡智の象徴とみなした<sup>57</sup>。そして、5世紀初め彼は自著の『神の国』の中で「スクライグ」を否定している<sup>58</sup>。「スクライグ」とは鉢に入れた水やインク、油、鏡、水晶球、剣、指の爪、骨、さらには新鮮なレバーなどを使用し、普通の人間には見えない過去・現在・未来などを霊視する魔法を指す<sup>59</sup>。しかしながら、グリム童話の『白雪姫<sup>60</sup>』の「鏡よ、鏡、世界で一番美しいのは誰」と鏡に問う邪悪な王妃に現れているように、スクライグは民衆の間で根強く信奉されていた<sup>61</sup>。

キャロルは叔父のスケフィントン・ラトウィッジ(Skeffington・Lutwidge)の影響もあり、顕微鏡や望遠鏡、写真術にも強い興味を持っていた。そのことが『アリス』の物語に影響している。例えば、アリスは地下の世界で、とても小さいドアを見つけ、その先に美しい庭があるのを知る。その時、アリスは望遠鏡のようにすると細く

伸びていけたら通れるのにと考える。また、鏡の国の家という発想は、キャロルが所有していたガラスハウスと呼ばれる写真を撮る為の部屋から来ているとも言われている。

また、夢と鏡の関係において、ロマン派の画家で夢を見える形で現したのがフューズリー (Fuseli) であり、その作品は『夢魔』である。この絵の中には、鏡が描かれており夢と鏡の映し出す共通性が伺える。この絵は心理学者であるフロイト (Freud) が自宅の居間にコピーを飾っていたことで有名である。

さらに、鏡には死のイメージも存在する。疫病が蔓延していた 16 世紀初めに活躍したアルブレヒト・デューラー (Albrecht・Durer) の作品にも鏡が死のイメージを表現している。1520 年に書かれた「若さと老いと死の寓意画」では、凸面手鏡の中の自分自身に見とれている若い裸体の女性と、骸骨の姿をした死がその背後に砂時計を掲げ、さらに女性の前には肩越しに彼女を見つめる座った老人が描かれている。ただ、これは 1509 年に若い頃から死のテーマに取りつかれたドイツ人画家のハンス・バルドゥング・グリーン (Hans・Baldung・Grien) の模倣であったと言われている<sup>62</sup>。

また、文学において鏡は、映し出される自然、神、本、劇だけでなく、その中に見える自己、真実、理想、幻想を象徴している。1300 年頃には、世俗的な鏡が文学の中に定着していたが、宗教的な象徴としての伝統的な役割も残っていた。その中でも代表作が鏡や光学に対する科学的な興味を持っていたダンテ (Dante) が著した『神曲』である。特に、彼の死の直前である 1321 年に完成した「天国編」には、鏡が数多く登場し、宗教的な象徴して使用されている。例えば、「天国編」の始まりは、月に関する鏡の実験であり、三面の鏡を用いて、神の光は距離と関係なく万物に等しく注がれることを示している。また、「天国編」は全体的に鏡や光のイメージが扱われている<sup>63</sup>。

『鏡の歴史』によると、1500 年には何らかの形で書名に「鏡」という語を含む本がヨーロッパで 350 冊以上あった。特に 1550 年から 1650 年にかけて印刷機の発明と相まって爆発的に増加する。特にエリザベス朝のイギリスにおいて顕著であった。そして、当時人気があった芝居の中でも鏡や鏡の比喩が重要な役割を演じていた。とりわけ、ウィリアム・シェイクスピアが 1589 年から 1613 年の間に書いた作品には鏡に関する含蓄に富んだ言葉が頻出する<sup>64</sup>。

またルイス・キャロルが生きた時代は新古典主義からロマン主義にかけての時代だったが、新古典主義では鏡がよく使われ、ロマン主義になってからも、ランプや泉が

喩えの主流になるものの鏡が使われなくなることはなかった<sup>65</sup>。

19世紀の後半において鏡が物語の中で扱われた作品は、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』の他にも、『ドリアン・グレイの肖像』などがある。この小説は、オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)によって1891年に書かれたものである。主人公のドリアン・グレイは絶世の美貌を持った上流階級の若者である。ある日、友人の画家バジルの友人の悪魔的享楽主義のヘンリー・ウォトン卿に出会い、退廃と悪徳の人生を送り、最後には若き日に書いてもらった肖像画(主人公が悪事を働く度に老いて行った)に、ナイフを突き刺した。すると、主人公自身が老いて、胸にナイフを突き刺して亡くなり、肖像画は若かりし頃のドリアンに戻っているという物語である。この中で、鏡は疑心暗鬼になっていたドリアンが鏡越しに召使いの表情を窺うのに使われている。また、鏡ではないが、見えないものを映しているのが、不思議な力を持ってしまったバジルが描いたドリアンの肖像画である。ドリアンが悪事や退廃的な生活を送る度に老けて醜くなった肖像画は、美しくあり続けるドリアンの見えない部分、物語の中では「魂」と言われているものを映し出しているのだ。

また、「魂」と鏡の関係でいえば、イギリスでは古くから人が亡くなった時に、鏡を壁に向けるか、鏡に布をかけて覗けないようにする風習があった。これには理由が二つあり、一つは魂が鏡に映った影で迷わぬようにすること。もう一つは、鏡を覗き込むと死者が映っていて、覗き込んだ人を死に誘うためと言われている<sup>66</sup>。

見えないものを映す、見えないが見てみたいものを映すものが鏡である。また、夢そのものが自分の無意識を映したものであるということからも、映るということ、あるいは映されるとということが夢と鏡を深く結び付けていると考える。特に『鏡の国のアリス』の中で分からないものを映す場面は、『ジャバウォッキー』の詩をアリスが鏡に映して読むところが有名である。

She puzzled over this for some time, but at last a bright thought struck her. 'Why, it's a Looking-glass book, of course! And if I hold it up to a glass, the words will all go the right way again.'

*Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE*, p.148

鏡文字で書かれたジャバウォッキーの詩を見たアリスは) 彼女はしばらくすっかり混



乱していましたが、ついに閃きました。「そうよ。これは鏡の国の本なのだわ！だからもし私が鏡に向かって持ったら、言葉はまた正しく読めるはずだわ。」

この場面で、解釈困難な本は鏡を媒体として一応彼女が理解できる言葉に生まれ変わる。しかしながら、この詩は、キャロルの造語を散りばめられて作られているので、アリスは「誰かが何かを殺した」ということ以外は理解できなかった。このように、人は見えない物を鏡に映すことで、見えたと思えても、それはあくまでも映されたものを見ているだけで、アリスのように本当のことはわからないということ、キャロルは伝えたかったのではないかと考えられる。

## 2 節 アリスがのぞいた鏡

『鏡の国のアリス』では、アリスが暖炉の上の鏡を覗くところから冒険が始まる(図 11)。ヴィクトリア朝の多くのイラストにも見受けられるが、暖炉の上の高い部分の鏡は、部屋を明るく見せる為の、その頃の室内装飾の特徴の一つでもある。



図 11 ジョン・テニエル画『鏡の国アリス』の鏡に入っていくアリス

『アリス』の物語では、鏡は3回しか出てこない。1つは『不思議の国のアリス』で白ウサギの部屋の鏡の脇に、アリスが飲むと大きくなるビンがおいてある場面と、『鏡の国のアリス』の冒頭部であり、鏡の世界に行く入り口となった鏡と、その鏡を通り抜けた先で見つけた「ジャバウォッキー」の本を読む為に、アリスが本をかざす鏡である。つまり、アリスが鏡を覗き込もうとしたのは一度きりであり、暖炉の上にある普通では7歳の少女には本来到底覗き込めない高さにあった鏡なのである。

また、『アリス』における鏡は実際の鏡だけでなく、鏡像現象とも言える「二つで一組」といったものがよく見受けられる。特にそれは、『鏡の国のアリス』の中に見られる。例えば、白と黒の子猫、チェスの駒は対になって歩き回り、トイドールディーとトイドールダムといった双子のキャラクターも登場する。キャラクター以外にも、行きたい方向に進む時は、あべこべな方向に進まなければならない、遠くにいるもののほうが大きく、記憶は未来から覚えるし、犯罪を起こす前に牢屋に入れられるなどと、鏡の国の話らしく、鏡像現象を考えさせることが到る所に散りばめられているのである。

また、キャロルはしばしば少女友達への手紙でも使用していたことからわかるが、鏡文字を書くのが幼い頃から得意で、『鏡の国のアリス』の中でも扱っている。それは、鏡文字で書かれた「ジャバウォッキー」の詩であり、これも鏡像現象である。さらに不思議なことは、『鏡の国のアリス』の白の女王は記憶をまだ起こっていない出来事から記憶することもできる人物であるということだ。その白の女王と出会ったアリスは以下のような驚くべき話を聞く。

'there's the King's Messenger. He's in prison now, being punished: and the trial doesn't even begin till next Wednesday: and of course the crime comes last of all.' 'Suppose he never commits the crime?' said Alice. 'That would be all the better, wouldn't it?' the Queen said,

*Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE* , p.197

(白の女王とアリスの会話)「王の伝令がいるが、彼は今刑務所の中で罰を受けておつてな。そして、裁判は来週の水曜日まで開かれない。無論、最後に罪を犯すのじゃ」「では、彼が罪を起こさなかったら？」とアリスは聞きました。「それは、ますます良

いことではないかね？」と白の女王様は言いました。

この王の伝令は、挿絵を見るとわかるが、『不思議の国のアリス』の帽子屋である(図12)。帽子屋がなんらかの罪を犯し、裁判を受け、その結果、刑務所に入るのが通常の順番である。しかしながら、この場合は罪を犯すのは、再来週の予定であり、まだ起こってもいないことを女王は記憶しているのである。これは、出来事の順番を白の女王が逆に記憶することで鏡像現象を表している。



図12 ジョン・テニエル画『鏡の国のアリス』の囚われた帽子屋(王の伝令)

また、マーチン・ガードナーは『注釈鏡の国のアリス』のこの場面で、キャロルの少女友達のアイザ・ボウマン(Isa・Bowman)の話を取り上げ、キャロルが鏡像の反転だけでなく、時間の反転にも興味を持っており、オルゴールを逆回転させていたという注をつけている<sup>67</sup>。この時間の逆転は、前述した『シルヴィーとブルーノ』の異刻式懐中時計の機能の一つにも使用され、キャロルがいかに反転現象に興味を持っていたかが伺える。

さらに、キャロルは、対という考えを好み『アリス』はどちらも12章立てとしている。『不思議の国のアリス』は夏、『鏡の国のアリス』は冬など鏡像現象を思わせる作りであり、それは『シルヴィーとブルーノ』シリーズにおいても同じである。ラッ

キンによれば、『不思議の国のアリス』の中の「誰か私の冒険について本を書くべきだわ！大きくなったら、書きましょう！」とアリスが言っているのと、キャロルによってこのアリスは描かれていることすらも対という形になっているとしている<sup>68</sup>。

### 3節 暖炉の上の鏡

『鏡の国のアリス』では、アリスが鏡を覗き込んだところから、物語が進む。アリスは、黒猫キティと鏡の中の家はどうなっているのかしら？と疑問に思い、好奇心から鏡を覗く。鏡が映し出す世界に心を奪われている様子が描かれているのである。

'Let's pretend there's a way of getting through into it, somehow, Kitty. Let's pretend the glass has got all soft like gauze, so that we can get through. Why, it's turning into a sort of mist now, I declare! It'll be easy enough to get through—' She was up on the chimney-piece while she said this, though she hardly knew how she had got there. And certainly the glass was beginning to melt away, just like a bright silvery mist.

*Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE*, p.143

「さあ、そこをすり抜けていく方法があるってことにしましょう、キティ。この鏡がガーゼみたいに柔らかくなって通り抜けられるってことにするの！あれっ、本当に鏡が霧みたいになって通り抜けることができそうだわ…」としゃべりながら、どうやってそこに登れたのでしょうか。彼女はいつの間にか炉棚の上に登っていたのです。そして、本当に鏡はまるできらめく銀の霧のように溶け始めつつあったのです。

この場面は、『鏡の国のアリス』の冒頭部であり、まさに主人公アリスが鏡をすり抜けて鏡の向こう側へ行く瞬間である。また、この瞬間すでにアリスは夢の世界に入り始めていることがわかる。なぜなら、アリスお得意の「ごっこ遊び」を始めようとしていると、普通登ることの出来ない炉棚の上にアリスは登り、溶けてすり抜けることの出来ない鏡をアリスはすり抜けるのである。この鏡は、アリスが覗いていた鏡であり、通常通りアリスとキティがいる部屋を映し出していた。アリスははじめ、鏡に映る自分のいる部屋の様子をキティに一生懸命話しているうちに、鏡に映らない部分

が気になり、鏡の国へ行く「ごっこ遊び」をし始める。見えないものを見たいという気持ちから鏡の世界に入っていくのは、鏡を使って見えない部分を見ようとする行為に似ていると考えられる。

15世紀のイングランドに現れたアレゴリーの一つであるウィリアム・ラングランド(William・Langland)の『農夫ピアズの幻想』でも、初めて夢を見る時、小川の土手で、水面を眺めているうちに眠るとある。水面は古代からナルキッソスの話でも有名だが、鏡の代用品として使われてきている<sup>69</sup>。そのことから、鏡(またはその役割をなすもの)が夢と現実との入り口を表していると考えられる。

さて、鏡は見えない部分を映し出してくれる人間が作り出した道具なのであることにはかわりない。それ故に、人間が鏡に対する好奇心や恐怖心を持つと考えられる。また神聖視するとも言われている。従って、キャロルは暖炉の上にある、普段覗き込むことの出来ない様々な印象を受ける鏡を、夢の入り口としたと考える。

このように、筆者は『アリス』の物語において、鏡は物語の中で主人公を夢の世界へ導入される装置と考える。

## 第4章 ルイス・キャロルと夢

### 1節 『アリス』の夢

『アリス』の物語の中には、どちらの物語にも大きく見て二つの夢が存在する。一つは、物語の一番の骨格となる、アリスが異世界へ行く夢である。もう一つの夢は、その夢の中で見ている夢である。

『不思議の国のアリス』において物語の骨格となる夢の始まりは、土手にお姉さんと一緒にいたアリスが退屈なあまり眠たくなってきたところに、チョッキを着た白ウサギが飛び出し、その上チョッキのポケットから懐中時計を取り出して時間を確かめるという場面である。そして、夢の終わりはトランプの兵隊がアリスめがけて降って来ているのを、払いのけようとして、ふと気づくとアリスは姉の膝を枕に横になっていたという場面である。

『鏡の国のアリス』の夢の始まりは、子猫のキティと一緒に暖炉の上の鏡を覗きながら、鏡の中に入れる「ごっこ遊び」をしていたアリスは、知らないうちに暖炉の上に登りこみ、本当に鏡が解けて鏡の国へ行くという場面である。そして、夢の終わりは、赤の女王様に腹を立てたアリスが「子猫にするわよ」と揺さぶっていると、本当に子猫に変わり、そしてアリスが目覚める場面である。これが二つの『アリス』の物語の枠となる夢である。この二つの夢については、眠りに入ったことはどこにも記述されていない。物語の終わりになり、目が覚める記述があるため、そこで、読者は初めて夢であることに気づくのである。

『アリス』の物語の中には、目が覚めてから、アリス自身が姉に夢で見た話をするという記述が、物語の途中や終わりに存在する。『不思議の国のアリス』の最後では、

'Oh, I've had such a curious dream!' said Alice, and she told her sister, as well as she could remember them, all these strange Adventures of hers that you have just been reading about;

*Alice's ADVENTURES IN Wonderland*, p.125

「まあ、私はなんて不思議な夢を見たのでしょうか！」とアリスは言いました。そして、彼女はちょうどあなたが読んで来た不思議な冒険の覚えていることすべてをお姉さんに話しました。

『不思議の国のアリス』では、この言葉以降の主役は姉となり、姉の視点で物語は終わるのである。『鏡の国のアリス』では、

Alice said afterwards, when she was telling her sister<sup>70</sup> the history of all this

*Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE, p.182*

アリスは後に、彼女のお姉さんにこのことを話した時に言いました。

以上のようなフレーズが度々出てくる。このことから、『鏡の国のアリス』も物語の終わりに姉に話すという筋はないが、この不思議な夢を後々姉に語っていることがわかるのである。『アリス』の夢はいつも姉に話す形を取り、物語となっている。

物語の枠となる夢以外の夢は、次のとおりである。『不思議の国のアリス』での、お茶会の大半を眠って過ごすヤマネ (Dormouse) や、アリスから夢の話聞いた姉が見た夢である。さらに、『鏡の国のアリス』ではポーンとなったアリスが電車の中で「今晚千ポンドの夢を見てしまうわ！」と言う呟き、7の目に進んだ際に場面の急な展開にアリスは混乱するが、近くに落ちていたプラムケーキの皿を見て「夢じゃなかったのね」と言うなど、夢の記述は他にもある。

『不思議の国のアリス』の中の夢の中の夢は、アリスがウサギ穴を落ちている最中に描かれている。

Alice began to get rather sleepy, and went on saying to herself, in a dreamy sort of way, 'Do cats eat bats? Do cats eat bats?' and sometimes, 'Do bats eat cats?'.... She felt that she was dozing off, and had just begun to dream that she was walking hand in hand with Dinah,

*Alice's ADVENTURES IN Wonderland, p.14*

アリスは眠くなってきました。そして、夢見心地の中で独り言を言い始めました。「猫はコウモリを食べるかしら？猫はコウモリを食べるかしら？」そして、時々、「コウモリは猫を食べるかしら？」とも言いました。(略)そして、彼女はうとうととしてきて、ダイナと手をつないで歩く夢を見始めました。

筆者が前に述べたように、アリスは、白ウサギを見た時にはすでに物語の枠となる夢の世界に入っていると考える。しかしながら、この場面ではまたアリスは眠気に襲われ、最終的にはまた夢を見始めるのである。夢の中の夢という構造である。一方、『鏡の国のアリス』では、以下のような夢の記述がある。

'He's dreaming now,' said Tweedledee: 'and what do you think he's dreaming about?' Alice said 'Nobody can guess that.' 'Why, about you!' Tweedledee exclaimed, ... 'And if he left off dreaming about you, where do you suppose you'd be?' .... 'You'd be nowhere. Why, you're only a sort of thing in his dream!'

*Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE*, p.189

「彼は今夢の中さ」と、トイドールディーが言いました。「そして、君は赤の王様がどんな夢を見ているかわかるかい？」アリスは「そんなこと誰にもわかる訳がないわ」と言いました。「君の夢さ！」とトイドールディーは、(略)叫びました。「そして、もし王様が君についての夢をみるのをやめてしまったら、君はどうなっちゃうかわかるかい？」(略)「君はどこにもいなくなるのさ。なぜなら、君は王様の夢の中だけでしか存在してないからさ！」

この場面は、物語の前半部である第4章の終わりの部分であり、アリスとトイドールダムとトイドールディーの三人が森の中で、眠っている赤の王様を見つけ、そこでの会話である。この夢の話については、この物語の最後まで残っている大切な場面である。

『不思議の国のアリス』では、アリス自身が夢の中で夢を見ているが、『鏡の国のアリス』では、アリス自身が夢を見ているわけではない。赤の王様の夢の中にしか自分



が存在していないと言われ、アリスは自分の存在について必死に考えるきっかけとなり、目が覚めて現実に戻ってからも、アリスは今の夢は赤の王様が見ていた夢なのか、自分がみた夢だったのかを考えるのである。

キャロル自身、夢というものは、夢を夢と気づかないで夢を見るものと日記で記している<sup>71</sup>。このように、物語の骨格となっている夢の中で、さらに夢を見ることで、夢が夢ではなく、現実のように感じられる仕組みとなって、キャロル自身の夢への考えがよく現れている。

ところで、ユングは『夢<sup>72</sup>』という論文で夢はドラマ（演劇）の形式と同じであると述べている。いわゆる、アリストテレスの『詩学<sup>73</sup>』において、構造とされている劇形式の4つの部分である。夢はまず場所と登場人物を宣言する。しかし、時間の宣言が行われることは稀であるとユングは述べている。次の段階で夢の筋書きの宣言が行われ、3段階目で結果か問題がわかることとなる。そして最後の4段階目は結果であるが、この段階まで夢の世界に現象するか否かは場合による、と解説している。このユングの夢の分析はアリスの夢にも適用出来る。

まず『不思議の国のアリス』では、夢の始まりと考えられる場面では、川岸でアリスが退屈にしていると、まず白ウサギがアリスの目の前を横切る。そのウサギは、チョッキを着て、時計を見ながら「遅刻だ！遅刻だ！」と言いながら、ウサギ穴にウサギと一緒にアリスも飛び込んでいく。この場面も、場所と登場人物が明記され、ウサギが遅刻すると言う筋書きが出現し、ウサギ穴にアリスも飛び込む所で問題が始まっていく。

キャロルが芝居好きだったことも影響しているのかもしれないが、『アリス』はユングの述べた「劇の構造をもつ夢」の形式で書かれていると見る事が出来て、その点でより夢の世界をリアルに表現していると考えられる。

また、ユングは夢解釈をするにあたり、夢は2種類の夢に分けられると述べている。それは、ユングの言葉そのものを使うと「大きい夢」と「小さい夢」である。「大きい夢」は神話的・民族的、人間の共通的なイメージを映し出したものであり、「小さい夢」は個人にしかわからないような意味を持つ夢である。例えば、『アリス』の物語の中には、エデンの園（楽園）を連想させる庭園が何回か描かれている。ユングは、夢の特徴とは、足りない論理性、疑わしい道徳性、暴力、そして明白な不合理とナンセンスによって奇妙で当惑させるような世界であるとしている<sup>74</sup>。

それは、『アリス』の世界の中では、ハートの女王の行動が最も当てはまるものである。ハートの女王は意に反すること、気に入らないことがあれば直ちに、「首を切れ！」と怒鳴り、裁判では評決よりも先に判決を求める。ナンセンスに限れば、アリスの入った世界もその住人の言動もすべてナンセンスなのである。

また、夢は夢をみただけでは、自分の中にしか存在しない世界となる。しかしながら、誰か相手に話すことで、夢の世界は始まるともユングは述べている。つまり、夢は夢見た人が話す以外で知ることは出来ないということである<sup>75</sup>。

## 2節 『シルヴィーとブルーノ』の夢

さて、キャロルの晩年の作品である『シルヴィーとブルーノ』シリーズに目を向きたい。『アリス』よりも上の年齢を対象に書かれた『シルヴィーとブルーノ』シリーズは、彼が存命中に出版された最後の2部作の小説である。1889年に前編である『シルヴィーとブルーノ』が、1893年に続編である『シルヴィーとブルーノ完結編』が出版された。この2部作は当初は1冊で出版する予定だったが、長過ぎた為に2つに分けられて出版された。また、前編の「妖精シルヴィー」と「ブルーノの復讐」の2章は、元々は1867年に『アUNT・ジュディズ・マガジン (Aunt・Judy's・Magazine)』で発表された短編小説であった。1873年に、これらの短編をもっと長い小説の核として使うという着想を得、キャロルが長年にわたって書き溜めてきた着想や対話のノートからの内容を、そこに紡ぎ合わせて出来た作品であった。なお、庭野延子によればキャロルは『アリス』の中で、現実の向こう側の世界を描いていたが、この物語では、現実と夢(妖精界)を交差させることを試みたとしている<sup>76</sup>。

さらに、アリス・リデルの絵の教師であり、キャロル自身も尊敬していたジョン・ラスキン (John・Ruskin) が、次に物語を書く時は、『アリス』のように脈絡のない構成ではなく、話の筋をつけたほうが良いという助言に従っても、書かれている<sup>77</sup>。

この作品についてマーチン・ガードナーは、『注釈アリス』の中で、詩の構成においても修辭的にも失敗作であると断定せざるを得ないとして、ヴィクトリア朝時代においても、今日においても読者が少ないのは致し方ないとしている。また、キャロルの伝記を著したデレック・ハドソン (Derek・Hudson) は、英文学史上最も興味ある失敗の例であるとしている<sup>78</sup>。しかし、仮に世間において評価がよくなかったとしても『シ

ルヴィーとブルーノ』シリーズは、キャロルの集大成作品と言える。

そもそもこの物語は、妖精の姉弟のシルヴィーとブルーノと主人公が現実と妖精の国とその間の世界の3つの世界を行き来する物語である。そして、妖精の国と現実の世界では大きな違いがある。それは言葉のナンセンスの度合いである。妖精の国において言葉は常軌を逸した会話の構成になっている反面、現実の世界の主人公を中心とした大人たちは、現実的な会話、例えば宗教・科学・社交界について実に高度な話を展開している。しかしながら、現実の大人たちの会話の高度さも極まれば、超現実的となり、ナンセンスな会話へと進んでいくのである。そのことから、妖精の国であっても、現実の世界であってもナンセンスな部分はある、そして、そこが互いの世界へ行き来するための入り口となるのである。

後にキャロルは本書の世界観を『シルヴィーとブルーノ完結編』の序文の中で述べているように、主人公が妖精の国へ行く時は眠りの状態であるとしている。下記がその説明文である。

... a Human....:

- (a) the ordinary state, with no consciousness of the presence of Fairies;
- (b) the 'eerie' state, in which, while conscious of actual surroundings, he is *also* conscious of the presence of Fairies;
- (c) a form of trance, in which, while unconscious of actual surroundings, and apparently asleep, he (i.e. his immaterial essence) migrates to other scenes, in the actual world, or in Fairyland, and is conscious of the presence of Fairies.

... a Fairy....

- (a) the ordinary state, with no consciousness of the presence of Human beings;
- (b) a sort of 'eerie' state, in which he is conscious, if in the actual world, of the presence of actual Human beings; if in Fairyland, of the presence of the immaterial essences of Human beings.

*Sylvie and Bruno Concluded*, pp.457-458

人間の場合(略)

- (a) 妖精の存在に気づかない、普通の状態。

- (b) 現実世界を意識しつつも、妖精の存在にも気づいている あやかし の状態。
- (c) 現実世界を意識することなく眠っているような夢うつつの状態。人(人の精神)は現実や妖精の国を動き回る。妖精の存在に気づいている。

妖精の場合(略)

- (a) 人間の存在を知覚しない、普通の状態。
- (b) 一種のあやかしの状態。現実の世界なら、人間の存在を知覚し、妖精の国なら、人間の精神の存在を近くする。

このように、起きている状態、眠くなって意識が眠りと覚醒の間にある状態、眠り(夢の中)の状態が、物語の中で巧みに表現されている。それは『シルヴィーとブルーノ』シリーズの物語の中では、主人公や妖精が行き来をするのである。『アリス』の中でも、夢を見始める時や、場面転換の突然性や曖昧さは表現されている。しかし、『シルヴィーとブルーノ』シリーズの中では、その突然性や曖昧さが誤植ではないかと考えてしまうほど、前後の脈絡がおかしく表現されている。しかしながら、それは夢と現実の行き来をキャロル独特の表現として、リアルに表現しているのである。

As we entered the breakfast-saloon, the Professor was saying "—and he had breakfast by himself, early: so he begged you wouldn't wait for him, my Lady. This way, my Lady," he added, "this way!" And then, with (as it seemed to me) most superfluous politeness, he flung open the door of my compartment,

*Sylvie and Bruno*, p.262

(総督である父からの頼みでシルヴィーとブルーノが教授を朝食の部屋に連れて行くのに、主人公が付き従っている場面からの続き)ぼくらが朝食の部屋に入っていくと、教授がしゃべっていた。「それで、あの方はおひとりで早くに朝食を召し上がったそうで、お待ちにならないようにとのご意向でした。こちらへ、奥様」彼はもう一度繰り返した。「こちらへどうぞ！」それからのはなはだ馬鹿丁寧な(と僕には思われた)物腰で僕のいる車室の扉をさっと開けて案内した。

妖精の国の朝食の部屋に入ったかと思うと、主人公は自分の乗っている列車のコンパートメントに一人の女性が案内されてくる場面と変化している。ここはまさに夢から覚醒した場面であるが、あまりにも唐突でありながら、自然な流れで文章が書かれている為、初めて読んだ読者には、どこまでが朝食の部屋の話で、どこからが車掌の言葉であるかがわからずに混乱してしまうであろう。つまり、「こちらへ、奥様」という言葉は、妖精の国にいる教授の言葉であり、現実世界の電車のコンパートメントまでご婦人を案内してきた車掌の言葉でもあるのだ。この物語において多くの場面転換に使われるのが、1つの言葉の共有である。しかし『アリス』の場合、主人公アリスも場面の变化ごとに驚く記述があるため、読み手にも変化があったことが伝わり、読み手が混乱することはまずない。しかし、『シルヴィーとブルーノ』シリーズは終始3つの世界を行き来し、その変化に主人公が驚くことは後半にならなければ出てこない。つまり、初めて読んだ読者は、この物語の構成が理解できるまで、まるで自分がナンセンスの世界に連れて行かれて、混乱しているように思えるのである。

また、『シルヴィーとブルーノ』シリーズの中心テーマである「Is all our life, then, but a dream, I wonder<sup>79</sup>? (人生はするとすべて夢に過ぎないのだろうか)」は、夢から覚めた主人公の言葉である。この言葉は、キャロル生誕150周年あたる1982年、ウェストミンスター寺院のポエツ・コーナーに作られた彼の石碑にも刻まれている<sup>80</sup>。そのことから、ルイス・キャロルが夢と人生についての興味の度合いが窺い知れる。

このように『シルヴィーとブルーノ』シリーズにおいて、夢は妖精の国へ行ったり、妖精と接触する世界への入り口である。また、ルイス・キャロルは『アリス』の時とは違い、夢を見ている状態の前にもう一つ、現実を知覚しながらも、現実では起こりえない世界を感じる状態という感覚を物語に表現したのである。

また、この話を書いている時に、キャロルは友人でもあった従兄弟を亡くしている。それは、『シルヴィーとブルーノ』の序文にも書かれている。その為か、主人公はキャロル、その友人アーサーは従兄弟を感じさせる。『シルヴィーとブルーノ完結編』でアーサーは一度死んだと思われ、葬式も済されてしまうが、実は人違いで瀕死のまま生きていたというところは、死者の復活すら感じさせる。それは、老いを感じ、友人を亡くしてしまったキャロルの夢を表現したのではないかと考えられる。

### 3節 ルイス・キャロルの夢

序論の中でも少し触れたが、キャロルはおそらく幼い頃から、夢というものに興味を抱いていたに違いない。その証拠に、序論でも挙げたように少年時代のキャロルは家庭内回覧雑誌の中で、夢をモチーフにした「恐怖」という詩を書いたり、彼は日記にも夢について書いている。その日記は1856年2月9日の日記である<sup>81</sup>。

We often dream without the least suspicion of unreality:” Sleep hath its own world,” and it is often as lifelike as the other.<sup>82</sup>

『不思議の国のアリス』の注

私たちはしばしば夢を夢と気づかないで見ている。「夢は夢自身の世界を持っている。」そして、夢はしばしば醒めている生命と同じように、生きているのである。

この日記の記述からもわかるように、キャロルは夢を夢と気づかないで見ている人間の現象に、強く興味を持っていたと考えられる。それ故に、『アリス』の物語の冒頭部に、アリスが夢を見ているという記述は一切なしに、あたかも現実にも起こった事柄のように不思議の世界を描くことが出来たと考える。

キャロルは『アリス』の物語を意図的に、夢の世界として作り上げている。だからこそ、『アリス』の物語は夢物語と言えるのではないだろうか。なぜなら、この夢は物語の中のアリスが見た夢であり、キャロルが求め続けていた永遠なる夢でもあるからである。永遠なる夢とは、アリス・リデルをはじめとした幼い友達が出会った頃のまままでいて欲しいこと、楽しかった日々が永遠であって欲しかったことなどではないだろうか。『アリス』の二つの序詩<sup>83</sup>を見れば、それは明らかである。

それでは、キャロルは日々不思議に感じ取っていた夢だけを物語や詩の中で使っていたのだろうか。筆者はそれだけではないと考える。筆者は、寝る時に見る夢以外に、いつまでも少女でいて欲しいという少女への夢、その少女が年老いていく自分を置いて行かないで欲しいという夢、そして、その先にある生と死という儂い夢のようなものを表現していると考えるのである。

坂井妙子は自著の『アリスの服が着たい』の中で、『地下の国のアリス』のキャロル直

筆の挿絵を見ればわかるが、実在のアリス・リデルには似ていないとしている。実際のアリス・リデルはストレートのおかっぱヘアで、裕福な家庭だった為、当時の流行の体にフィットしたドレスを着ていた。けれども、ルイス・キャロルの描いたアリスは、ロングウェーブの髪を持ち、ラファエロ前派風なドレスを身につけている<sup>84</sup>。

そのことを踏まえると、実在のアリス・リデルが果たして本当にキャロルにとっての夢の子供だったのだろうか。それは違うと考えられる。もちろん、アリス・リデルをモデルに作られていることは確かである。しかしながら、作者がキャロルである以上、キャロルの視点や願望が入っていることは疑いのないことである。ラッキンはアリスの夢は、狂ったような大人の世界で、それは彼女が望んで入った領域であり、彼女自身が持っているものであるとしている<sup>85</sup>。子供らしくいて欲しいと願うキャロルは、アリス・リデルにこのような世界を垣間見ていたのかもしれない。

さらに、ヴィクトリア朝時代は、大英帝国が世界の覇権を握っていた時代であり、品格というものが重視された時代でもあった。特に女性は「レディ」でなければならなかった。そもそも「レディ」とは、貴族の令夫人・令嬢を意味していたが、ヴィクトリア朝に入ると、精神性や教養が強調され、中流階級の女性までもが「レディ」であろうとした。当時の女性らしさとはか弱く、可憐で、かつ、家庭の天使でなければならなかった。また、色白で、虚弱なのが良くとされ、病人に近いものが理想像であり、文化の病とまで言わしめた<sup>86</sup>。そのような「レディ」となる前の少女を好んでいたキャロルは、このような「レディ」というものを揶揄するような表現を『アリス』の物語の中を含め、いつまでも少女でいて欲しいというような願いもあってか、時間が止まることや、年齢を止めさせるというようなニュアンスも多く見受けられる。

また、猪熊葉子は物語の中のアリスを、勇気や誇りを忘れず、礼儀作法の常識を兼ね備えたヴィクトリア朝の典型的な少女である一方で、驚くべき苦境に話題を変えて難を逃れる才能の持ち主であるとしている。また、この才能は、普通の子供にはこのように冷静沈着には行動が取れないため、ある意味子供が憧れる落ち着きのある子供としての理想像と描かれているとしている<sup>87</sup>。そのことを踏まえて考えると、『アリス』の主人公のアリスとモデルであるアリス・リデルは、必ずしも同一ではないのである。

楠本君恵は自著の『出会いの国の「アリス」』の中で、『鏡の国のアリス』の赤の王様はキャロル自身であり、キャロルが夢見るのをやめる（創作を中止する）時、7歳半のアリスは消滅してしまうのは当然のことであると述べている<sup>88</sup>。このことから、

彼はあくまでも、アリスは自分の夢見た子供であり、無論、アリス・リデルをモデルにしてはいるものの、物語の中のアリスは実在のアリス・リデルとは違うという考えを感じる事が出来る。

再び、ラッキンの言葉を借りれば、アリスは物語の中で成長をしていて、『不思議の国のアリス』の中では、時や言葉といったものに振り回されていたのが、『鏡の国のアリス』では、支配する側に回っているとしている<sup>89</sup>。確かに、『不思議の国のアリス』の中のアリスは、無秩序の中をしっかりと歩きまわっているようにも感じるが、しばしば、その矛盾に腹を立て、振り回されている。しかし、『鏡の国のアリス』では、冒頭部から、白の王様の言葉を逆に支配してしまい、自ら女王になる。女王になる直前に道中を共にするキャロルだとも言われている白の騎士へのアリスのいらだちは、おそらくキャロルも感じていたものに違いないのだ。

キャロルは時の移ろい行く残酷性や人は日々死へ向かっていくことも題材に取り上げている。人生というものがいかに儚く、少女友達がいつまでも自分のそばにはいてくれないことも理解していたといえる。従って、キャロルは永遠に変わらないワンダerlandを作ることで、自分の夢を叶えていたのではないだろうか。

また、キャロルが58歳の時に著した『子供部屋のアリス』の最後は、「さようなら、可愛いアリス、さようなら」となっており、やはり彼が幼い頃のアリス・リデルやキャロルが作り出したアリスに執着していることがわかる。アリス・リデルとの付き合いがなくなってから、かなりの時間がたっているのにも関わらず、キャロルにとって特別な存在だったことが感じられる。しかしながら、この可愛いアリスは現実のアリスではなく、キャロルが思い出の中に夢見るアリスである。キャロルはアリス・リデル以外の多くの少女友達とも出会い、別れ、そして、思い出になるという過程を経験しているからこそ、『アリス』の主人公アリスへの想いが大きくなったのではないだろうか。

だからこそ、『アリス』の物語の中で残酷に過ぎる時の混乱や、人が自分の成長・老化に気づく鏡の中で、出来事が未来から過去へ動く状態をキャロルは、ナンセンスの影で操っていたのではないかと考える。生と死、永遠と理想というキャロルの願望を、彼が興味を持っていた時(時計)と鏡を媒体として、『アリス』の夢は、より夢らしく描かれたのである。



## 終章

『アリス』の中では、様々な道具が扱われているが、今回筆者は時計（時）と鏡に焦点をあてた。それは、時計や時や鏡に対する言及が多いこともあるが、これらは夢を表わすのに重要な装置であると考えたからである。

時計は、通常正確であり、正確であるべきものである。また、時間は守るべきもので、守ることで秩序が守られている。それが、崩壊してしまった場所が『アリス』の夢の世界である。古来から権力を手にする為には、様々な時間の管理が必要と考えられ、『アリス』の中でも多くのキャラクターが時への支配を重視している。逆に、時を管理、支配出来なくなると永久に時は止まってしまい、同じ時を繰り返している。それは、夢の無秩序を表わす一つとなっている。

また、鏡も夢の無秩序を表わしている。鏡は宗教とも深い関係があり、時には神の象徴としても考えられる。鏡は見えるものを映し映されるだけでなく、見えないものも映し映される。しかしながら、アリスは鏡の見えない部分を覗こうと考えて、鏡の国へと入っていく。そこは、近づけば相手が遠ざかり、記憶は未来から逆に記憶し、1カ所に立ち止まるためには、全力疾走し続けなければならない世界である。

『アリス』の世界は夢の世界として描かれている。その無秩序な夢の中に夢が存在しているのも、『アリス』における夢の特徴でもある。『アリス』における夢は、物語の枠組みとなる夢と、その夢の中の夢の二重構造となっている。しかし、後に『シルヴィーとブルーノ』シリーズで彼は、眠りと覚醒だけではなく、その二つの間の世界も描き始める。それは、『アリス』の世界とは少々違った枠組みとなる。

それでも、キャロルが抱いていた夢というテーマを消してしまうものでは決してなかった。なぜなら、キャロルは、人生は夢に過ぎないのかという疑問を抱いていたからである。その一つの原因は、彼の幼友達にあると考えられる。主に幼い少女友達は、いつまでも子供ではいてくれず、大人になっていってしまい、彼との友情関係は消えてしまう。（幾人かは大人になっても関係は続いていたが。）その、子供という儚さを永遠に閉じ込めてしまいたかったのか、キャロルは多くの子供を被写体として写真を撮っている。

そして、大人になっていく子供を見送るキャロルもまた、老いて死ぬのである。最

後にラッキンの言葉を再び借りたい。ラッキンは、『鏡の国のアリス』の登場人物であるハンプティ・ダンプティの「どちらが主人か・・・それに尽きる」という言葉が『アリス』の夢を表わしているとしている<sup>90</sup>。なぜなら、キャロルは『アリス』を著し、アリスを操っている影の支配者である。しかし、キャロルもまた、アリス・リデルとの思い出に支配されている。『鏡の国のアリス』の最後に、アリスが「どっちが見た夢なのかしら？」と疑問を投げかけているが、それはキャロル自身が持っていた疑問でもあったと考える。だからこそ、キャロルは、子供が大人になり、人は皆老いて死する、そんな時の流れの無情さと、それを映し出している鏡を扱い、『アリス』の中で夢を表現したのだと考えられる。

- 
- <sup>1</sup>和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波文庫、p.200。
- <sup>2</sup>以後基本的にキャロルとする。
- <sup>3</sup>2003年頃より、キャロルの縁者と接した研究者が従来の呼び方を訂正したのをきっかけとして、キャロルの本名 Dodgson の呼び方が G を発音していた「ドジソン」から、G を発音しない「ドッドソン」に変わりは始める。日本ルイス・キャロル協会内でも、キャロルが劇場の少女ゲイナー・シンプソンへ宛てた手紙が決め手となり、「ドッドソン」で落ち着く。手紙の内容は、1873年12月27日付で「私の名前にはGが入っています。…もし、また間違ったら、君をエイナーと呼びますよ。」とある。「ドッドソン」と呼ばれていたからこそ、少女はGを落として綴ってしまったからだと考えられるからである。楠本君恵『出会いの国の「アリス」ルイス・キャロル論、作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007、p.262。
- <sup>4</sup>以後彼の名はルイス・キャロルに統一する。
- <sup>5</sup>この題は原題を直訳すると『不思議な国のアリスの冒険』であるが、昭和5年に長沢才助によってつけられた『不思議の国のアリス』が定着していると考え、こちらの翻訳を使用する。(楠本君恵『出会いの国の「アリス」ルイス・キャロル論、作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007、p.245。)
- <sup>6</sup>以後全て書籍(和・洋両存するものに限り)は、初出の時のみ両方の題を表記するが、それ以外は和名の題のみ使用する。
- <sup>7</sup>この題は原題を直訳すると『鏡の向こうでアリスが見たもの』であるが、昭和3年に浦木山茂によってつけられた『鏡の国のアリス』が『不思議の国のアリス』と対になって定着している為、こちらの翻訳を使用する。(楠本君恵『出会いの国の「アリス」ルイス・キャロル論、作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007、p.245。)
- <sup>8</sup>『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures In Wonderland*)と『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-glass And What Alice Found There*)の両作品を一度に記す場合に限り『アリス』とする。
- <sup>9</sup>以後『シルヴィーとブルーノ』(*Sylvie and Bruno*)と『シルヴィーとブルーノ完結編』(*Sylvie and Bruno Concluded*)の両作品を一度に記す場合に限り『シルヴィーとブルーノ』シリーズとする。
- <sup>10</sup>ステファニー・ラヴェット・ストッフル『「知の発見」双書73 「不思議の国のア

- 
- リス」の誕生』高橋宏訳、創元社、大阪、1998、p.1。
- 11 坂井妙子『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.2。
- 12 楠本君恵『翻訳の国のアリスールイス・キャロル翻訳史・翻訳論』未知谷、東京、2001、p.3-4。
- 13 フレッド・イングリシ『幸福の約束』中村ちよ、北條文緒訳、紀伊国屋書店、東京、1990。
- 14 <http://www.disney.co.jp/movies/alice/> (日本語公式サイト)  
<http://disney.go.com/disneypictures/aliceinwonderland/>(英語公式サイト)より。
- 15 定松正編『ルイス・キャロル小事典』研究社出版、東京、1994、p.125-128。
- 16 モートン・N・コーエン著『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999、p.167。
- 17 この題名は原題を直訳すると『アリスの地下の冒険』であるが、他の『アリス』の題名に合わせて、『地下の国のアリス』という題名を使用する。
- 18 モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999、p.164。
- 19 坂井妙子『アリスの服が着たい ヴィクトリア児童文学と子供服の誕生』勁草書房、東京、2007、p.7-15。
- 20 モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999、pp.223-230。
- 21 ルイス・キャロル『子供部屋のアリス』高橋康也・高橋迪訳、新書館、2003、p.104
- 22 Carroll, L., *THE NURSERY "Alice"*, (Macmillan and CO, 1889)、以後引用の文は、初回のみ題名も記載し、以降はページ数のみとする。
- 23 後の和訳も特別な場合を除き、筆者訳とする。
- 24 家庭内回覧雑誌とは、ルイス・キャロルが12歳(1845年)になり、当時自宅のあったクロフトから15キロほど離れたリッチモンドの学校へ一人親元を離れた頃に、家族(特に弟、妹)を楽しませるために作ったものである。この家庭内回覧雑誌の製作は、1862年頃まで続けられ、多くの少年時代の彼の作品が残された。ステファニー・ラヴェット・ストッフル『「知の発見」双書 73 「不思議の国のアリス」の誕生』高橋宏訳、創元社、大阪、1998、p.20-24。

- 
- <sup>25</sup> Carroll, L., *The Complete Illustrated Lewis Carroll*, (Wordsworth Editions, 1996), p.823.
- <sup>26</sup> 楠本君恵『出会いの国の「アリス」 ルイス・キャロル論・作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007
- 定松正編『ルイス・キャロル小事典』研究社出版、東京、1994
- ジョン・ガッデニョ『ルイス・キャロル』小池三子男訳、創林社、東京、1985
- ジョン・ガッデニョ『ルイス・キャロル Alice から Zenon まで』鈴木晶訳、法政大学出版局、東京、1988
- モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
- モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(下)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
- <sup>27</sup> Cohen, N, M., *Lewis Carroll a biography*, (Macmillan, 1995 ), p325.
- <sup>28</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume1 containing Journal2 January to September 1855*,(The Lewis Carroll Society,1993), p.112-113.
- <sup>29</sup> 楠本君恵『出会いの国の「アリス」 ルイス・キャロル論・作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007
- 定松正編『ルイス・キャロル小事典』研究社出版、東京、1994
- モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
- モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(下)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
- <sup>30</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994),p43.
- <sup>31</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994), p48.
- <sup>32</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994), p.48-49.
- <sup>33</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994), p.65.
- <sup>34</sup> Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December*

- 
- 1856,(The Lewis Carroll Society,1994), p.77.
- 35 Wakeling, E, .*Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994), p.78-79.
- 36 Wakeling, E, .*Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume4 containing Journal8 May 1862 to September 1864*,(The Lewis Carroll Society,1997), p.94-95.
- 37有澤隆 『図説 時計の歴史』河出書房新社、東京、2006。
- 38 ジョン・フィッシャー 『キャロル大魔法館』高山宏訳、河出書房新社、東京、1978、p.29-30。
- Fisher, J., *The Magic of Lewis Carroll*, (Simon and Schuster, 1973), p.25-26.
- 39 ジャック・アタリ著 『時間の歴史』倉持不三也訳、原書房、1986、p.2-3。
- 40 Carroll, L., *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY. Norton , 2002)p.72-73。
- 41 ルイス・キャロル著 『シルヴィーとブルーノ』柳瀬尚紀訳、筑摩書房、東京、1987より、柳瀬尚紀の訳を使用。
- 42 Carroll, L., *The Complete Illustrated Lewis Carroll*, (Wordsworth Editions, 1996), p408.
- 43 Carroll, L. , *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY. Norton , 2002), p.73-74
- 44船戸英夫 『一角獣・不死鳥・魔女 英文学の周辺』鷹書房、東京、1980、p.222。
- 45 『初版グリム童話 1(全4巻)』吉原素子、吉原高志訳、白水社、東京、1997、p.35-38
- 46 同名の作品が多数存在する。
- 47 『初版グリム童話 1(全4巻)』吉原素子、吉原高志訳、白水社、東京、1997、p.111-123
- 48坂井妙子 『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.8-9。
- 49坂井妙子 『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.16。
- 50船戸英夫 『一角獣・不死鳥・魔女 英文学の周辺』鷹書房、東京、1980、p.142-143。
- 51 G・マクドナルド 『ファンタステス：成年男女のための妖精物語』蜂谷昭雄訳、筑摩書房、東京、1999
- 52坂井妙子 『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.102-104。
- 53坂井妙子 『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.98-99。

- 
- 54 坂井妙子『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002、p.90-93。
- 55 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007。
- 56 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p18。
- 57 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.184-185。
- 58 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p64。
- 59 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.60-61。
- 60 『初版グリム童話2(全4巻)』吉原素子、吉原高志訳、白水社、東京、1997、p.60-72
- 61 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.65。
- 62 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.212-213。
- 63 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.188-190。
- 64 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007、p.190-192。
- 65 マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007。
- 66 船戸英夫『一角獣・不死鳥・魔女 英文学の周辺』鷹書房、東京、1980。
- 67 Carroll, L. , *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY: Norton , 2002), p.196.
- 68 Ronald, R , Thomas, ." Dream of Power in Alice in *Wonderland*' *The Authority of Dreams – Freud and the fictions of the Unconscious*, p.55-61.
- 69 W・ラングランド『農夫ピアズの幻想』池上忠弘訳、新泉社、1975。
- 70 厳密に言うと、『不思議の国のアリス』の her sister は、絵も会話もない本を読んでいることや、最後にアリスにお茶へ行くように指示するところからも、姉だということがわかる。しかしながら、『鏡の国のアリス』では、姉かどうかは定かではない。本稿は、『不思議の国のアリス』に合わせて姉とする。
- 71 Carroll, L. , *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY: Norton , 2002),
- 72 Jung, C. , *DREAMS*, translated By Hull, R.F.C(Princeton University Press)
- 73 アリストテレス『詩学』松本仁助、岡道男訳、岩波書店、東京、1997。
- 74 Jung, C. , *DREAMS*, translated By Hull, R.F.C(Princeton University Press)
- 75 Jung, C. , *DREAMS*, translated By Hull, R.F.C(Princeton University Press)

- 
- 76 庭野延子「名作ダイジェスト 『シルヴィーとブルーノ』(1889)『シルヴィーとブルーノ完結編』(1893)」『ルイス・キャロル小事典』定松正編、研究社出版、東京、1994、p.79。
- 77 定松正編『ルイス・キャロル小事典』研究社出版、東京、1994、p.37-38。
- 78 猪熊葉子、神宮輝夫『イギリス児童文学の作家たち ファンタジーとリアリズム』研究社出版、東京、1975、p.24-25。
- 79 Carroll, L., *Lewis Carroll The Complete Works*, (Collector's Library Edition, 2005), p264.
- 80 定松正編『ルイス・キャロル小事典』研究社出版、東京、1994、p.111-112
- 81 Wakeling, E., *Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994), p.38
- 82 Carroll, L., *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY. Norton, 2002), p.67.
- 83 Carroll, L. , *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY. Norton , 2002), p.7-8, p.135-136.
- 84 坂井妙子『アリスの服が着たい ヴィクトリア児童文学と子供服の誕生』勁草書房、東京、2007、p.42-43。
- 85 Ronald, R , Thomas, ." Dream of Power in Alice in *Wonderland' The Authority of Dreams – Freud and the fictions of the Unconscious*, p.55-61.
- 86 岩田託子・川端有子『英国レディになる方法』河出書房新社、東京、2004。
- 87 猪熊葉子、神宮輝夫『イギリス児童文学の作家たち ファンタジーとリアリズム』研究社出版、東京、1975、p.19-20。
- 88 楠本君恵『出会いの国の「アリス」ルイス・キャロル論、作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007、p.258。
- 89 Ronald, R , Thomas, ." Dream of Power in Alice in *Wonderland' The Authority of Dreams – Freud and the fictions of the Unconscious*, p.55-61.
- 90 Ronald, R , Thomas, ." Dream of Power in Alice in *Wonderland' The Authority of Dreams – Freud and the fictions of the Unconscious*, p.55-61.



---

## 引用・参考文献

\*今回、参考文献を作成するに当たり、あまり関係のないと思われる『アリス』に関する料理や、『アリス』と『アリス』から影響を受けたと考えられている作品論に関する文献は省略しております。

### キャロル作品（原典）

- ・ Carroll, L. , *Alice's Adventured underground* (複製) + Brown, S. , *The Original Alice*,(The Folio Society,2008)(開目)
- ・ Carroll, L. , *Alice's ADVENTURES IN Wonderland*, (Macmillan Children's Books ,1996)
- ・ Carroll, L. , *Lewis Carroll The Complete Works*, (Collector's Library Edition, 2005)
- ・ Carroll, L. , *The Annotated Alice*, edited by Martin Gardner. (NY. Norton , 2002).
- ・ Carroll, L. , *The Annotated HUNTING OF THE SNARK*, edited by Martin Gardner. (Adam Gopnik, 2006).
- ・ Carroll, L. , *The Complete Illustrated Lewis Carroll*,(Wordsworth Editions, 1996)
- ・ Carroll, L. , *THE NURSERY "Alice"*,(Macmillan and CO,1889)
- ・ Carroll, L., *Through the Looking-glass AND WHAT ALICE FOUND THERE*,(Macmillan Children's Books,1996)
- ・ Wakeling, E. , *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume1 containing Journal2 January to September 1855*,(The Lewis Carroll Society,1993)
- ・ Wakeling, E. , *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume2 containing Journal4 January to December 1856*,(The Lewis Carroll Society,1994)
- ・ Wakeling, E. , *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume3 containing Journal5 January 1857 to April 1858*,(The Lewis Carroll Society,1995)
- ・ Wakeling, E. , *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge*

- 
- Dodgson (Lewis Carroll) Volume4 containing Journal8 May 1862 to September 1864,(The Lewis Carroll Society,1997)*
- Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume5 containing Journal9 September 1864 to January 1868 including the Russian Journal,(The Lewis Carroll Society,1999)*
  - Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume6 containing Journal10 April 1868 to December 1876,(The Lewis Carroll Society,2001)*
  - Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume7 containing Journal11 January 1877 to June 1883,(The Lewis Carroll Society,2003)*
  - Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume8 containing Journal12 July 1883 to 30 June 1892,(The Lewis Carroll Society,2004)*
  - Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume9 containing Journal13 July 1892 to December 1897,(The Lewis Carroll Society,2005)*
  - Wakeling, E, *.Lewis Carroll's Diaries the Private journals of Charles Lutwidge Dodgson (Lewis Carroll) Volume10 with a Reconstrction of Two Missing Volumes Private Journals 1 ad 3 1851-1855,(The Lewis Carroll Society,2007)*

### キャロル作品（翻訳）

- 川戸道昭・榊原貴教編集『明治翻訳文学全集（新聞雑誌編）11 サッカレー/キャロル集』大空社、東京、1999
- 千森幹子編『不思議な国のアリス～明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集成全4巻』エディション・シナプス、東京、2009
- ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』岡田忠軒訳、角川書店、東京、1959
- ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』マーチン・ガードナー注、高山宏訳、東京図書、東京、1980
- ルイス・キャロル『かつらをかぶった雀蜂』柳瀬尚紀訳、れんが書房新社、東京、

---

1978

- ・ルイス・キャロル『原典対照ルイス・キャロル詩集』高橋康也、沢崎順之助訳、筑摩書房、東京、1989
- ・ルイス・キャロル『子供部屋のアリス』高橋康也・高橋迪訳、新書館、2003
- ・ルイス・キャロル『シルヴィーとブルーノ』柳瀬尚紀訳、筑摩書房、東京、1987
- ・ルイス・キャロル『スナーク狩り』高橋康也訳、新書館、東京、2007
- ・ルイス・キャロル『[新装版]不思議の国のアリス・オリジナルーAlice's Adventures Under Groundー』高橋宏訳、書籍情報社、2006
- ・ルイス・キャロル『不思議の国 ルイス・キャロルのロシア旅行記』笠井勝子訳、開文社出版、東京、2007
- ・ルイス・キャロル『新注 鏡の国のアリス』マーチン・ガードナー注、高山宏訳、東京図書、東京、1994
- ・ルイス・キャロル『新注 不思議の国のアリス』マーチン・ガードナー注、高山宏訳、東京図書、東京、1994
- ・ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』田中俊夫訳、岩波書店、東京、199
- ・ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』マーチン・ガードナー注、石川澄子訳、東京図書、東京、1980
- ・ルイス・キャロル『不思議の国の論理学』柳瀬尚紀訳、筑摩書房、東京、2005
- ・ルイス・キャロル「不思議の国 ルイス・キャロルのロシア旅行記」笠井勝子訳、開文社出版、東京、2007
- ・ルイス・キャロル『もつれっ話』柳瀬尚紀訳、筑摩書房、東京、1989
- ・ルイス・キャロル『ルイス・キャロル詩集 不思議の国の言葉たち』高橋康也・沢崎順之助訳、筑摩書房、東京、1982

#### 『アリス』文学論等

- ・安藤聡『ファンタジーと歴史的危機 - 英国児童文学の黄金時代 - 』彩流社、2003
- ・猪熊葉子、神宮輝夫『イギリス児童文学の作家たち ファンタジーとリアリズム』研究社出版、東京、1975
- ・エリザベス・シューエル「法廷と夢」『現代思想 14 (6)』梅正行訳、p.68-78、青土社、東京

- 
- ・大賀美智子編『月刊絵本7月号 特集・アリスの国へ』すばる書房、東京、1976
  - ・笠井勝子「ルイスキャロルの『ロマンスメント』」『英米文学研究33』p.7-24、文教大学女子短期大学部英語コミュニケーション学科、1998
  - ・川端有子『非存の庭 ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』をめぐって』
  - ・楠本君恵『出会いの国の「アリス」ルイス・キャロル論、作品論 Encounters with Alice』未知谷、東京、2007
  - ・楠本君恵『翻訳の国のアリス—ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論』未知谷、東京、2001
  - ・桑原茂夫『図説 不思議の国のアリス』河出書房新社、東京、2007
  - ・小原信『ファンタジーの発想 心で読む5つの物語 -』新潮社、東京、1988
  - ・定松正『英米児童文学の系譜』こびあん書房、1996
  - ・定松正『子どもと文学の冒険』松柏社、1995
  - ・サリー・ヴァーロウ『英国読本 紅茶の時間に』秋國忠教、石原浩澄、井田俊隆、小泉博一、芳田真沙子訳、文理閣、京都、2000
  - ・重松宗育『アリス、禅を語る』筑摩書房、東京、1995
  - ・清水康編『ユリイカ12月号 特集=ルイス・キャロル』青土社、東京、1978
  - ・ジャッキー・ヴォルシュレガー著『不思議の国をつくる』安達まみ訳、河出書房新社、東京、1997
  - ・ジョン・フィッシャー『キャロル大魔法館』高山宏訳、河出書房新社、東京、1978
  - ・ステファニー・ラヴェット・ストッフ『「知の発見」双書73 「不思議の国のアリス」の誕生』高橋宏訳、創元社、大阪、1998
  - ・宗宮喜代子『アリスの論理 不思議の国の英語を読む』日本放送出版協会、2006
  - ・宗宮喜代子『ルイス・キャロルの意味論』大修館書店、2001
  - ・平倫子「『鏡の国のアリス』の一考察」『北星論集18』pp.163-186、1980
  - ・平倫子「『シルヴィーとブルーノ』考 写真家 小説家としてのL・キャロル」『北星論集36』1999、p.69-101
  - ・平倫子『ルイス・キャロル 身体医文化の実相』英宝社、2008
  - ・平倫子「ルイス・キャロルの家庭回覧雑誌 *Sylvie and Bruno*の萌芽として」『北星論集34』1997、p.63-92
  - ・平倫子「ルイス・キャロルの子ども時代 ディアズベリー時代を中心に—」『北星論

---

集 22』1984、p.199-223

- ・平倫子『ルイス・キャロルの図像学』英宝社、2000
- ・高橋康也編『アリス幻想』すばる書房、東京、1976
- ・高橋康也『アリスの国の言葉たち 高橋康也対談集』新書館、1981
- ・高山宏『アリス狩り』方英社、東京、2008
- ・原昌『比較児童文学論』大日本図書、東京、1991
- ・ピーター・ハント編『写真とイラストでたどる一子どもの本の歴史』さくまゆみこ・福本友美子・こだまともこ訳、柏書房、東京、2001
- ・ピーター・ミルワード『童話の国イギリス マザー・グースからハリー・ポッターまで』小泉博一訳、中央公論新社、2001
- ・舟崎克彦・笠井勝子『不思議の国の“アリス” - ルイス・キャロルとふたりのアリス』求龍堂、東京、1991
- ・フレッド・イングリシ『幸福の約束』中村ちよ、北條文緒訳、紀伊国屋書店、東京、1990
- ・細井勉「『不思議の国のアリス』と数学」『数学文化 2』p.14-21、日本評論社、2004
- ・細井勉著・訳『ルイス・キャロル解説 不思議の国の数学ばなし』日本評論社、東京、2004
- ・三村明「『不思議の国のアリス』の庭から 庭の児童文学」『帝京大学文学部紀要 英語英文学』p.123 - 141
- ・三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、1993
- ・三宅興子『児童文学の愉楽』翰林書房、2006
- ・三宅美千代「魔法にかけられた暮らし」『国文学：解釈と教材の研究』p.121 - 125、學燈社、2008
- ・村瀬学『児童文学はどこまで闇を描けるか 上野瞭の場所から』JICC 出版局、1992
- ・山崎和恕「否定後の絡んだ比較表現の特異性とその含意：『不思議の国のアリス』における否定的基準設定の実験(教養編)」『星稜論苑 13』p.155-174、星稜女子短期大学、1991
- ・吉田新一『イギリス児童文学論』中教出版、1980
- ・ロジャー・セール『ファンタジーの伝統』定松正訳、玉川大学出版部、東京、1990
- ・ロビン・ウィルソン『数の国のルイス・キャロル』岩谷宏訳、ソフトバンク クリ

- 
- エイティブ株式会社、東京、2009
- ・ 脇明子 『魔法ファンタジーの世界』 岩波新書、東京、2006
  - ・ M・ハンチャー 『アリスとテニエル』 石毛雅章訳、東京図書、東京、1997
  - ・ SORTIE 編集室 『不思議の国のアリスへの旅』 河出書房新社、東京、2002
  - ・ Empson, W., "Alice in Wonderland:The Child Swain" in *Modern Critical Interpretations: Lewis Carroll's Alice's Adventures in Winderland* ed. by H. Bloom. (Chelsea House Pub., ).
  - ・ Fisher, J. , *The Magic of Lewis Carroll* ,(Simon and Schuster, 1973)
  - ・ Gordon, C. , *Beyond The Looking Glass Reflections of Alice and her family*,(Harcourt Brace Jovanovich, 1982)
  - ・ Rackin, D. , "Love and Death in Carroll's Alices," in *Modern Critical Interpretations: Lewis Carroll's Alice's Adventures in Wanderland* ed. by H. Bloom. (Chelsea House Pub., ).
  - ・ Sewell ,W,B, and Imholtz, C. , *An Annotated International Bibliography of Lewis Carroll's Silvie and Bruno Books*, (Oak Knoll Press and The British Library,2008 )
  - ・ Wilson, R. , *Lewis Carroll in Numberland* ,(Allen Lane, 2008)

## ルイス・キャロル

- ・ アイザ・ボウマン 『ルイス・キャロルの思い出』 河底尚吾訳、泰流社、東京、1986
- ・ 飯沢耕太郎 「写真家ルイス・キャロル 写真の国のアリスたち」 『美術手帳 ( 567 )』 p.114-123、美術出版社、1986
- ・ 楠本君恵 『出会いの国の「アリス」 ルイス・キャロル論・作品論 Encounters with Alice』 未知谷、東京、2007
- ・ 定松正編 『ルイス・キャロル小事典』 研究社出版、東京、1994
- ・ ジョン・ガッデニヨ 『ルイス・キャロル』 小池三子男訳、創林社、東京、1985
- ・ ジョン・ガッデニヨ 『ルイス・キャロル Alice から Zenon まで』 鈴木晶訳、法政大学出版局、東京、1988
- ・ 楚輪松人 「ルイス・キャロル：神なき時代の逆説家 『不思議の国のアリス』に見るダーウィンの衝撃 」 『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 2』 p.27-41、1999

- 
- ・高橋康也『ヴィクトリア朝のアリスたちールイス・キャロル写真集ー』新書館、2003
  - ・トマス・ハインド『アリスへの不思議な手紙 ルイス・キャロルの珠玉のメルヘン』別宮貞徳・片柳佐智子訳、東洋書林、2001
  - ・土岐島雄、アプトインターナショナル編『ルイス・キャロル没後百年記念 『不思議の国のアリス』誕生の謎展・図録』印象社、東京、1997
  - ・ヘルムット・ガーンズハイム『写真家ルイス・キャロル』人見憲司・金澤淳子訳、青弓社、1998
  - ・モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
  - ・モートン・N・コーエン『ルイス・キャロル伝(下)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999
  - ・J・パドニー『アリスのいる風景 写真でみるキャロル伝』石毛雅章訳、東京図書、東京、1989
  - ・M・フィッツジェラルド「ルイス・キャロル(1832 - 1898)」『天才の秘密 - アスペルガー症候群と芸術的独創性』井上敏明監訳、世界思想社、京都、2009、p.78-93
  - ・Cohen, N, M. , *Lewis Carroll a biography*, (Macmillan, 1995 )
  - ・Collingwood, D, S, . *The Lewis Carroll Picture Book*, (Tower Book, 1971)
  - ・Gattegno , J. , *Lewis Carroll Fragments of a Looking - Glass From Alice to Zeno*, (George Allen & Unwin, 1977)
  - ・Gernsheim, H., *LEWIS CARROLL PHOTOGRAPHER*, (Maxparrish & Colimited, London, 1950)
  - ・Guiliano, E, . *Lewis Carroll An Annotated International Bibliography 1960-77*, (The Harvester Press, 1980)
  - ・Hudson, D. , *Lewis Carroll*, (Constable, 1954)
  - ・Hudson, D. , *Lewis Carroll An illustrated biography*, (Constable, 1954)

## イギリス・ヴィクトリア朝

- ・岩田託子・川端有子『英国レディになる方法』河出書房新社、東京、2004
- ・海老池 俊治『ヴィクトリア時代の小説 社会史的背景を考慮して』南雲堂、東京、1958

- 
- ・川崎寿彦『森のイングランド ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』平凡社、東京、1987
  - ・川本静子『ガヴァネス』みすず書房、東京、2007
  - ・川本静子、松村昌家『MINERVA 歴史・文化ライブラリー ヴィクトリア女王 - ジェンダー・王権・表象 - 』ミネルヴァ書房、京都、2006
  - ・クリティン・ヒューズ『十九世紀イギリスの日常生活』植松靖夫訳、松柏社、東京、1999
  - ・ケロウ・チェズニー『ヴィクトリア朝の下層社会』植松靖夫・中坪千夏子訳、高科書店、東京、1991
  - ・小林章夫『イギリス流「社交」の楽しみ』PHP 研究所、東京、1996
  - ・小林章夫『召使たちの大英帝国』洋泉社、東京、2005
  - ・坂井妙子『アリスの服が着たい ヴィクトリア児童文学と子供服の誕生』勁草書房、東京、2007
  - ・坂井妙子『ウエディングドレスはなぜ白いのか』勁草書房、東京、1997
  - ・坂井妙子『『不思議の国』の衣服考』日本女子大学紀要人間社会学部第 10 号、東京、1999
  - ・ジュリア・プルウィット・ブラウン『十九世紀イギリスの小説と社会事情』松村昌家訳、英宝社、東京、1987
  - ・城戸照文『英国ヴィクトリア朝 人生批評・審美批判』千城、東京、1992
  - ・谷田博幸『図説 ヴィクトリア朝百貨事典』河出書房新社、東京、2001
  - ・角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国 イギリス都市生活史』平凡社、東京、1982
  - ・ディヴィッド・スーデン『図説 ヴィクトリア時代 イギリスの田園生活誌』山森芳郎、山森喜久子訳、東洋書林、東京、1997
  - ・出口保夫『イギリスの優雅な生活』世界文化社、東京、1997
  - ・出口保夫・林望『イギリスはかしこい』PHP 研究所、東京、1997
  - ・出口保夫『世紀末のイギリス』研究社出版、東京、1996
  - ・戸矢理衣奈『下着の誕生 ヴィクトリア朝の社会史』講談社、東京、2000
  - ・バーバラ・T・ゲイツ『世紀末自殺考ーヴィクトリア朝文化史ー』桂文子訳、英宝社、1999
  - ・パメラ・ホーン『ヴィクトリアン・サーヴァント - 階下の世界 - 』子安雅博訳、英



---

宝社、東京、2005

- ・バンクス夫妻『ヴィクトリア時代の女性たち』河村貞枝訳、東京、1980
- ・フィリップ・メイソン『英国の紳士』金谷展雄訳、晶文社、東京、1991
- ・横山茂雄編『危ない食卓 十九世紀イギリス文学にみる食と毒』新人物往来社、東京、2008
- ・リチャード・ドイル『挿絵の中のイギリス』富山太佳夫編訳、弘文堂、東京、1993
- ・G・K・チェスタートン『ヴィクトリア朝の英文学』安西徹雄訳、春秋社、東京、1982
- ・G・M・ヤング『ある時代の肖像 ヴィクトリア朝のイングランド』松村昌家、村岡健次訳、ミネルヴァ書房、京都、2006
- ・J・パーヴィス『ヴィクトリア時代の女性と教育』香川せつ子訳、ミネルヴァ書房、京都、1999
- ・L・C・B・ミーマン『ヴィクトリア時代のロンドン』社本時子、三ツ星堅三訳、創元社、大阪、1987
- ・Brocklehurst, R. , *The Victorians*, (Usborne Publishing Ltd. , 2008)
- ・Opie ,R. , *The Victorian Scrapbook*, (Pi global publishing, 2005)
- ・Paxman ,J. , *The Victorians*, (BBC books, 2009)
- ・Williams ,B. , *Victorian Britain* ,(Jarrold publishing, 2005)
- ・Wilson, N, M. , *The Victorians*, (Arrow books, 2003)

## イギリス文学史

- ・相島倫嘉『イギリス文学の流れ』南雲堂、東京、1994
- ・入山恵子、川上美津子『イギリス文学史入門』水声社、東京、2006
- ・坂本完春編『英文学を学ぶ人のために』世界思想社、京都、1987
- ・櫻庭信之監訳『図説 イギリス文学史』大修館、東京、1990
- ・中村邦生、木下卓、大神田丈二『たのしく読める イギリス文学』ミネルヴァ書房、京都、1994
- ・日本イギリス文学・文化研究所『イギリス文学ガイド』荒地出版社、東京、1997
- ・久守和子、大神田丈二、中川僚子編『MINERVA 英米文学ライブラリー 旅するイギリス小説 移動の想像力』ミネルヴァ書房、京都、2000

---

## イギリス文学

- ・『世界幻想文学・総解説』自由国民社、東京、1993
- ・大場建治編注訳『真夏の夜の夢』研究社、東京、2005
- ・大山俊一『シェイクスピア夢物語』研究者出版、東京、1975
- ・桐山恵子『境界への欲望あるいは変身 ヴィクトリア朝ファンタジー小説』世界思想社、京都、2009
- ・生地竹郎編『チヨースーとその周辺』文理書院、東京、1968
- ・チャールズ・ラム『エリア随筆』平井正穂訳、八潮出版社、東京、1978
- ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』池央耿訳、光文社、東京、2006
- ・W・ラングランド『農夫ピアズの幻想』池上忠弘訳、新泉社、1975

## 挿絵

- ・リチャード・ダルビー『<子どもの本>黄金時代の挿絵画家たち』吉田新一・宮坂希美江訳、西村書店、2006

## 絵画

- ・イグナシオ・ゴメス・デ・ディアニーヨ『現代美術の巨匠 サルヴァドール・ダリ』佐和瑛子訳、美術出版社、東京、1988
- ・エリック・シェーンズ『岩波 世界の巨匠 ダリ』新関公子訳、岩波書店、東京、1992
- ・岡田隆彦監修『アートギャラリー 現代世界の美術 全 21 巻 18 ダリ D A L I』集英社、東京、1986
- ・岡村多佳夫『西洋絵画の巨匠 3 ダリ』小学館、東京、2006
- ・サルバドール・ダリ、アラン・ボケス『ダリとの対話』岩崎力訳、美術公論社、東京、1980
- ・ジャン＝ルイ・ガイユマン『「知の再発見」双書 103 ダリーシュルレアリスムを超えて』遠藤ゆかり訳、創元社、大阪、2006
- ・鈴木治雄、長谷川智恵子『世界の名画 100 選 ラスコウ洞窟画からサルバドール・ダリまで』求龍堂、東京、1997

- 
- ・メレディス・イスリントンスミス『ダリ』野中邦子訳、文藝春秋、東京、1998
  - ・ロバート・ラドフォード『岩波 世界の美術 ダリ』岡村多佳夫訳、岩波書店、東京、2002
  - ・ロベール・デシャルヌ『ダリ全集 第1巻 1910～1933年』巖谷国士訳、講談社、東京、1985
  - ・ロベール・デシャルヌ『ダリ全集 第2巻 1934～1944年』日高達太郎、巖谷国士訳、講談社、東京、1985
  - ・ロベール・デシャルヌ『ダリ全集 第3巻 1945～1983年』日高達太郎、巖谷国士訳、講談社、東京、1986

## 道具

- ・G・ハイツ＝モア『西洋シンボル事典 キリスト教美術の記号とイメージ』野村太郎、小林頼子、内田俊一、佐藤茂樹、宮川尚利訳、八坂書房、東京、1994
- ・J・C・クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治、鈴木繁夫訳、三省堂、東京、1992
- ・マイケル・ファーパー『文学シンボル事典』植松靖夫訳、東洋書林、東京、2005
- ・ローズマリー・エレン・グィリー『魔女と魔術の事典』荒木正純・松田英監訳、原書房、東京、1996

## 夢

- ・氏原寛監訳『夢の道＝ユング心理学による夢解釈』倍風館、東京、1996
- ・北浜邦夫『ヒトはなぜ、夢を見るのか』文藝春秋、東京、2000
- ・ジークムント・フロイト『夢と夢解釈』金森誠也訳、講談社、東京、2001
- ・ジュヌビエーヴ・沙羅、小泉茉莉花『幸運・不運が一目でわかる夢占い』ナツメ社、東京、2008
- ・ジュヌビエーヴ・沙羅、小泉茉莉花『夢占い』ナツメ社、東京、1997
- ・鑪幹八郎『夢分析入門』創元社、大阪、1976
- ・ハヴロック・エリス『夢の世界』藤島昌平訳、岩波書店、東京、1941
- ・東山紘久、杉野要人、西田吉男編『「夢」を知るための109冊』創元社、大阪、1992
- ・不二龍彦『決定版 夢占い大事典』学習研究社、東京、1999
- ・不二龍彦『詳細 夢解き事典』学習研究社、東京、1993

- 
- ・ベティ・ベサース『ドリーム・ブック 「夢」のシンボル辞典』坂内慶子訳、中央アート出版社、東京、1992
  - ・ポングラチュ・M&ザントナー・I『夢の王国 夢解釈の四千年』種村季弘、池田香代子、岡部仁、土合文夫訳、河出書房新社、東京、1987
  - ・ルイス・ジェームズ・R『<夢>の世界を探検するために 夢の事典』塚本利明、久泉伸世、金里美、鈴木英夫訳、彩流社、東京 2005
  - ・C・A・マイヤー『夢の意味：ユング心理学概説（2）』河合隼雄監修、河合俊雄訳、創元社、大阪、1989
  - ・C・G・ユング『元型論』紀伊国屋書店、東京、1999
  - ・C・G・ユング『夢分析』入江良平訳、人文書院、京都、2001
  - ・C・G・ユング『夢分析』入江良平・細井直子訳、人文書院、京都、2002
  - ・M-L・フォン・フランツ『夢と死』氏原寛訳、人文書院、京都、1987
  - ・Jung, C. , *DREAMS*, translated By Hull, R.F.C (Princeton University Press)

## 夢と文学

- ・『世界の幻想文学・総解説』自由国民社、東京、1993
- ・小倉美知子「中世のイギリス文学における「夢」の主題」『幻想のディスコースー民衆文化と芸術の接点』p.311-332、多賀出版、1994
- ・クリストファー・フレイリング『悪夢の世界 ホラー小説誕生』荒木正純・田口孝夫訳、東洋書林、東京、1998
- ・佐藤泰正編『文学における 夢』笠間書院、東京、1978
- ・鈴鹿照子・安溪真一『ファンタジーと内的世界 二十四の夢物語』人文書院、京都、1996
- ・根本美作子『眠りと文学 プルースト、カフカ、谷崎は何を描いたか』中公新書、東京、2004
- ・東山紘久・杉野要人・西田吉男編『「夢」を知るための116冊』創元社、大阪、2006
- ・J・L・ボルヘス『夢の本』堀内研二訳、国書刊行会、東京、1992
- ・Ronald, R , Thomas, .” Dream of Power in Alice in *Wonderland*’ *The Authority of Dreams – Freud and the fictions of the Unconscious*, pp.55-61.

---

## 時計(時)

- ・有澤隆『図説 時計の歴史』河出書房新社、東京、2006
- ・井澤彌男『時の環・歴史の環 ある時間随考 - 』創造社、大阪、1977
- ・織田一郎『時計と人間 そのウォンツと技術 』裳華房、東京、1999  
東京、2001
- ・ジャック・アタリ『時間の歴史』倉持不三也訳、原書房、1986
- ・高橋里美『時間論』協同出版、1952
- ・藤井保憲『時間とは何だろうか』岩波書店、東京、1989
- ・マリー・ルイゼ・フォン・フランツ『イメージの博物誌 12 時間 過ぎ去る時と円環する時』平凡社、1982
- ・ロバート＝チェインバース『イギリス古事民俗誌』加藤憲市訳、大修館書店、東京、1996

## 時計と文学

- ・チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』小池滋訳、新書館、東京、1985

## 鏡

- ・川崎寿彦『鏡のマニエリスム ルネッサンス想像力の側面』研究社出版、東京、1978
- ・サビーヌ・メルシオール＝ボネ『鏡の文化史』竹中のぞみ訳、法政大学出版局、東京、2003
- ・多田智満子『鏡のテオリア』大和書房、東京、1977
- ・久守和子、中川僚子編『インテリア で読む イギリス小説 室内空間の変容 』ミネルヴァ書房、京都、2003
- ・マーク・ペンダーグラスト『鏡の歴史』樋口幸子訳、河出書房新社、東京、2007
- ・由水常雄『鏡の魔術』中央公論社、東京、1991

## 鏡と文学を考える作品例

- ・ワイルド『ドリアン・グレイの画像』西村孝次訳、岩波書店、東京、1936

---

## 文学と動物を考えるためのレファレンス

- ・井村君江『妖精学大全』東京書籍、東京、2008
- ・キャサリン・ブリッグズ『イギリスの妖精』石井美樹子、山内玲子訳、筑摩書房、東京、1991
- ・キャロル・ローズ『世界の怪物・神獣事典』松村一男監訳、原書房、2004
- ・キャロル・ローズ『世界の妖精・妖怪事典』松村一男監訳、原書房、2003
- ・坂井妙子『おとぎの国のモード ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草社、東京、2002
- ・ハリエット・リトヴォ『階級としての動物』三好みゆき訳、国文社、東京、2001
- ・船戸英夫『一角獣・不死鳥・魔女 英文学の周辺』鷹書房、東京、1980
- ・J・L・ボルヘス、M・ゲレロ『幻獣辞典』柳瀬尚紀訳、晶文社、東京、1998

## その他

- ・『初版グリム童話 1(全4巻)』吉原素子、吉原高志訳、白水社、東京、1997
- ・『初版グリム童話 2(全4巻)』吉原素子、吉原高志訳、白水社、東京、1997
- ・アリストテレス『詩学』松本仁助、岡道男訳、岩波書店、東京、1997
- ・和辻哲郎『人間の学としての論理学』岩波文庫
- ・G・マクドナルド『ファンタステス：成年男女のための妖精物語』蜂谷昭雄訳、筑摩書房、東京、1999

---

## 図版出典

- 図 1 クライスト・チャーチ学寮の大ホールに飾られているルイス・キャロルの肖像画 (2007年9月4日筆者撮影) . . . . . 9
- 図 2 ダーズバリ村の入り口の看板 (2007年8月31日筆者撮影) . . . . . 10
- 図 3 ルイス・キャロルの父が牧師を務め、キャロル自身洗礼を受けたダーズバリのオール・セインツ教会 (2007年8月31日筆者撮影) . . . . . 10
- 図 4 キャロルの父が勤めていたリポンの大聖堂 (2007年8月30日筆者撮影) . . . . . 11
- 図 5 キャロルの一家が住んでいたクロフト村の牧師館 (2007年8月30日筆者撮影) . . . . . 14
- 図 6 クロフト村にあるキャロルも教壇に立った学校 (2007年8月30日筆者撮影) . . . . . 14
- 図 7 キャロルが家庭内回覧雑誌に書いた挿絵 (モートン・N・コーエン著『ルイス・キャロル伝(上)』安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、東京、1999、p64) . . . . . 15
- 図 8 オックスフォード大学クライスト・チャーチ校 (2007年9月4日筆者撮影) . . . . . 15
- 図 9 キャロルの直筆の『地下の国のアリス』 . . . . . 18
- 図 10 ジョン・テニエル画『不思議の国のアリス』の白ウサギ . . . . . 27
- 図 11 ジョン・テニエル画『鏡の国アリス』の鏡に入っていくアリス . . . . . 33
- 図 12 ジョン・テニエル画『鏡の国のアリス』の囚われた帽子屋 (王の伝令) 35